

仙台市文化財調査報告書第125集

仙台平野の遺跡群Ⅷ

——昭和63年度発掘調査報告書——

1989年3月

仙台市教育委員会

仙台市文化財調査報告書第125集

仙台平野の遺跡群Ⅷ

——昭和63年度発掘調査報告書——

1989年3月

仙 台 市 教 育 委 員 会

序 文

国庫補助事業として「仙台平野の遺跡群」調査に着手して8年が経過しました。これまで陸奥国分寺、圓分尼寺跡の国指定史跡の範囲確認調査や、郡山遺跡、富沢遺跡などの個人住宅建築に伴う小規模調査などを実施してまいりましたが、特に今年度は、陸奥国分尼寺跡、郡山遺跡にかかる調査を実施しました。

近年、文化や歴史的事項に関する市民意識は、少しづつ高まりを見せてきておるとは言え、第一次、第二次オイルショック以来、文化財一般に対する無関心も一方では芽ばえている事実も見のがせません。オイルショックによる景気低迷が徐々に回復し、新しいわが国の進路を見極めなければならないこの時期こそ、しっかりと生活の中に文化に対する位置を確保しなければならないと考えます。

開発に伴う発掘調査が多い中、この「仙台平野の遺跡群」の調査は、一步一步、その成果を上げて来たものと言えますし、また、生活の中に文化財をいかに位置付けていくかを考える手がかりをあたえてくれるものと考えます。こうした調査も多くの方々や有識者のご支援があってこそ、成果を上げられるものと思います。

昨年度末までに旧宮城町、泉市、秋保町が仙台市の仲間入りしましたので、これからは、もっと広い視野に立って調査を行っていく必要があります。日々の変化が激しい昨今ですが、精一杯努力してまいる所存でありますので、今後とも、ご指導、ご支援を切にお願い申し上げ、刊行のご挨拶といたします。

平成元年3月

仙台市教育委員会

教育長 藤井 翁

例　　言

1. 本書は昭和63年度国庫補助事業である緊急遺跡範囲確認事業に伴う「仙台平野の遺跡群」の発掘調査報告書である。
2. 本書中、郡山遺跡の調査報告は略報とし、詳細については、仙台市文化財調査報告書第124集「郡山遺跡IX — 昭和63年度発掘調査概報一」の中にまとめた。
3. 本書中の土色については「新版標準土色帖」(小山・佐原：1973)を使用した。
4. 第1図は建設省国土地理院発行の2万5千分の1「仙台南西部」「仙台南東部」の一部を縮小して使用したものである。
5. 第2図は仙台市仙塩広域都市計画図2千5百分の1の一部を縮小して使用した。
6. 実測図中並びに本文中に記載した方位は磁北に統一してある。これは、仙台では、真北に対する西偏7°20'である。
7. 実測図中の水糸高は標高で示してある。
8. 本文執筆は結城慎一（I、II(2)）と主浜光朗（II(1)）が担当した。編集も両者が行った。
9. 本文中に掲載した造構及び実測図、写真並びに出土遺物は、全て仙台市教育委員会で保管している。
10. 今年度の事業は昭和63年5月に着手し、平成元年3月に終了した。

本文目次

序文	
例言	
I 調査計画と実績	1
II 発掘調査報告	2
(1) 陸奥国分尼寺跡	2
1. 遺跡の位置と環境	2
2. 調査に至る経過	3
3. 基本層位	4
4. 検出遺構	6
5. 出土遺物	13
6.まとめ	20
(2) 郡山遺跡	50

図表目次

第1図 周辺の遺跡	2	第17図 平瓦I	26
第2図 調査区位置図	3	第18図 平瓦II	27
第3図 基本層位模式図	4	第19図 平瓦III	28
第4図 遺構配置図	5	第20図 道具瓦I	29
第5図 SK-1 土坑	6	第21図 道具瓦II	30
第6図 SK-2 土坑	7	第22図 文字瓦ほか	31
第7図 IV区断面図	7	第23図 近世陶磁器・カワラケ・土師器	32
第8図 IV区SX-1 性格不明遺構	8	第24図 中世陶器・瓦質土器	33
第9図 I区南部とIII区北東部	9・10	第25図 平瓦片	34
第10図 I区・III区東壁断面図	11	第26図 郡山遺跡と調査位置	51
第11図 III区北西部ピット群	14	写真1 平瓦片	34
第12図 軒丸瓦	21	写真2 SX-1	35
第13図 軒平瓦I	22	写真3 SX-2	35
第14図 軒平瓦II	23	写真4 SX-2 遺物出土状況	35
第15図 丸瓦I	24	写真5 III区北東部壁 (SX-2) 断面	36
第16図 丸瓦II	25	写真6 SX-3	36

写真7	S K - 1	36	写真21	近世陶磁器	48
写真8	S K - 2	37	写真22	その他の遺物	49
写真9	III区西部のピット群	37	第1表	発掘調査実績表	1
写真10	III区ピット1遺物出土状況	37	第2表	軒瓦出土表	13
写真11	軒丸瓦I	38	第3表	小柱穴・ピット群計記表	15
写真12	軒丸瓦II	39	第4表	軒丸瓦・軒平瓦観察表	23
写真13	軒平瓦I	40	第5表	丸瓦観察表	25
写真14	軒平瓦II	41	第6表	平瓦観察表	28
写真15	軒平瓦III	42	第7表	道具瓦観察表	33
写真16	軒平瓦IV・丸瓦I	43	第8表	文字瓦ほか観察表	33
写真17	丸瓦II	44	第9表	近世陶磁器・カワラケ・土師器 観察表	34
写真18	平瓦	45	第10表	中世陶器・瓦質土器観察表	34
写真19	道具瓦	46	第11表	平瓦片観察表	34
写真20	文字瓦	47			

I. 調査計画と実績

現在の仙台市における周知の埋蔵文化財包載地（遺跡）の数は、650箇所に達している。これらの遺跡は、その一つ一つが先人の残した貴重な文化遺産であり、先人の歴史と当時の具体的な生活の様子とを現代に伝えるものである。われわれは、これらの文化遺産をわれわれの世代で消滅させることなく、次の世代へと継承していくべき責務を担っている。また、このような文化財保護の努力を続ける一方で、これらの文化遺産を学術研究の場にとどまらず、広く学校教育や社会教育の場、そして市民生活の中においても活用していく必要がある。しかし、ここ数年来の都市化に伴う公共事業や民間による開発行為の増加は、特に平野部において著しく、これらの遺跡の中にはそれによって破壊の危機にさらされているものも多数多い。

当教育委員会では、これらの遺跡の範囲の確認と性格の究明のため、昭和56年度より国の補助を受け「仙台平野の遺跡群」の発掘調査を実施してきた。8年目をむかえた今年度は、陸奥国分尼寺跡、郡山遺跡の2遺跡で計8箇所の発掘調査を実施した。

今年度の発掘調査計画と実績は以下のとおりである。

1. 目的 仙台平野に分布する遺跡群の範囲確認、性格明確のための発掘調査
個人住宅の建築等の小規模な開発に伴う発掘調査

2. 調査面積 約660m²

3. 調査期間 昭和63年5月9日～11月14日

4. 調査体制

　調査主体 仙台市教育委員会

　調査担当 仙台市教育局社会教育部文化財課
(課長) 幸坂春一
(同課調査係(係長) 佐藤 降 (主任) 結城慎一 (主事) 主浜光朗
(同課管理係(係長) 成田時雄 (主事) 山口 宏

調査・整理参加者 根本廣江、庄子錦一郎、柏沢義徳、吉田りつ子、外川みづ子
佐久間広恵、遠藤深雪、増田瑞枝、篠川光夫

調査協力 小枝仙選(費洞完國分尼寺住職)

第1表 發掘調査実績表

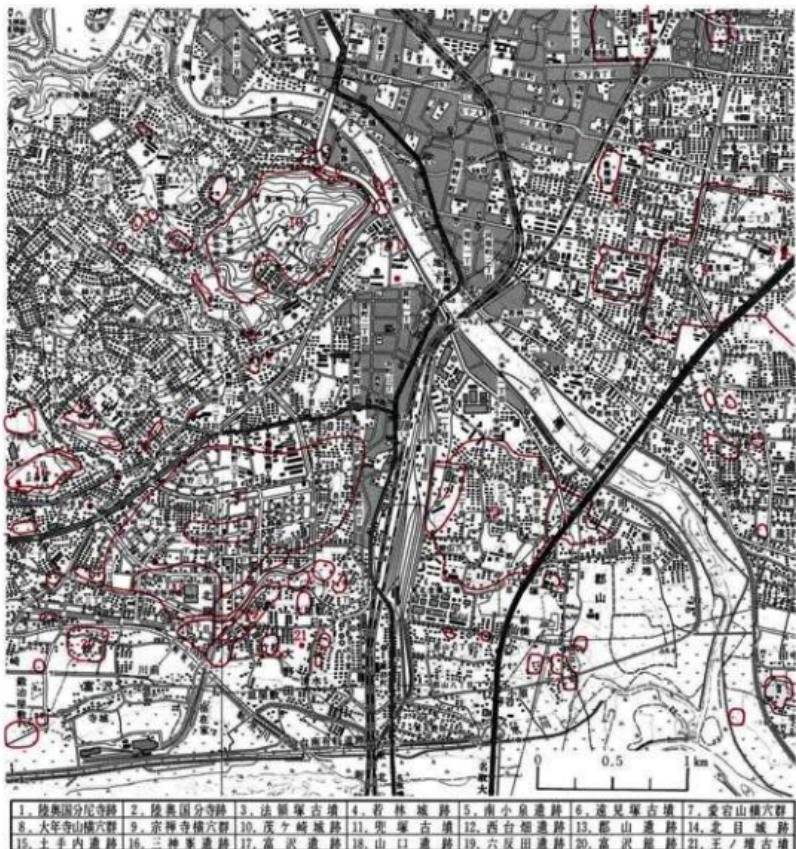
地名	学名	俗名(同上)	山林地		森林地	非耕地	草地地
			山林地	耕地			
西山区	麻子村	麻子村(同上)	309				
	第1次测量时	白石山麻子村	202-2				
	第2次测量时	白石山麻子村	174-12	14	140.75m ²	400m ²	400m ²
	第3次测量时	白石山麻子村	174-40	14	140.50m ²	400m ²	400m ²
	第4次测量时	白石山麻子村	174-15	15	140.50m ²	400m ²	400m ²
	第5次测量时	白石山麻子村	174-20	15	140.50m ²	400m ²	400m ²
晋宁区	晋宁区	晋宁区	1-2.0	1.0	100.00m ²	100.00m ²	100.00m ²
	晋宁区	晋宁区	1-3.6	1.0	100.00m ²	100.00m ²	100.00m ²
呈贡区	呈贡区	呈贡区	1-11-101	101	100.00m ²	100.00m ²	100.00m ²
	呈贡区	呈贡区	1-11-116	116	100.00m ²	100.00m ²	100.00m ²
	呈贡区	呈贡区	1-11-134	134	100.00m ²	100.00m ²	100.00m ²

II. 発掘調査報告

[1] 陸奥国分尼寺跡

1. 遺跡の位置と環境

陸奥国分尼寺跡（仙台市文化財登録番号 C-420、宮城県遺跡地名登載番号01020）は、仙台市の東部、仙台市白萩町、宮千代一丁目に所在し、東北線仙台駅の東南約2.5kmの位置にある。本遺跡の西方約600mに位置する陸奥国分寺跡のすぐ西側を北東から南西方向に長町—利府線と呼ばれる地質構造線が走り、仙台市街台地と沖積平野を分けている。本遺跡は、長町—利

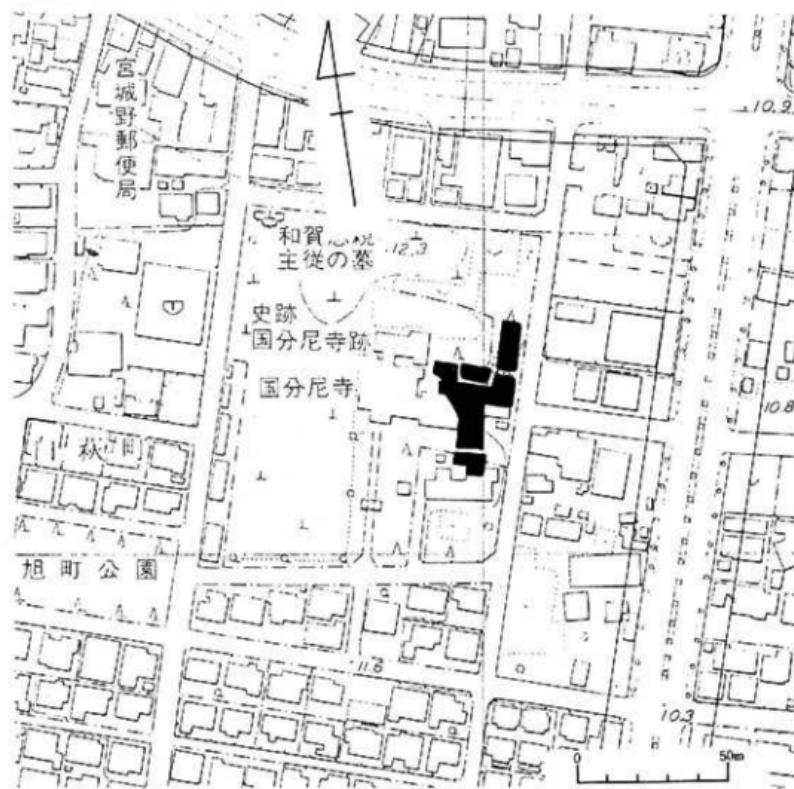


第1図 周辺の遺跡

府線の北西側の中町段丘の延長部分にあるが、地形的には宮城野海岸平野の西端部にある。標高は11mから12mである。周辺の遺跡には、前述の陸奥国分寺跡があり、北東約9.5kmには陸奥国府多賀城跡及び多賀城廃寺跡がある。また、北方約3kmには陸奥国分尼寺を含むこれらの遺跡に瓦を供給した台の原・小田原窯跡群がある。南方には、南小泉遺跡、若林城跡などの遺跡がある。

2. 調査に至る経過

本遺跡は、古くから現在の曹洞宗国分尼寺地内、及びその周辺に古瓦が散布していたこと、礎石の残る観音塚があったことから、陸奥国分尼寺跡であると言われていたところである。陸奥国分尼寺は、天平13(741)年の聖武天皇の勅によって「法華滅罪之寺」として、国分僧寺とともに建立されているが、承暦4(1080)年に顛倒し、文治5(1189)年の源頼朝の平泉討伐の際、兵火により焼け落ちた後についての記録は残っていない。元亀元(1570)年になってそ



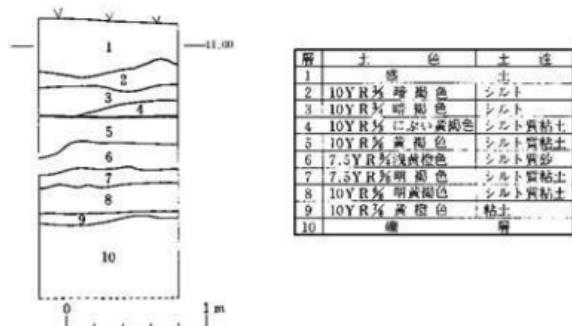
第2図 調査区位置図

これまでの天台・真言宗を曹洞宗に転宗し、現在に至っている。昭和23年10月に観音塚周辺が国指定史跡となつたが、昭和30年代には、無断現状変更行為により、史跡指定地内に多くの家屋が建てられているという事態となつた。このため、仙台市は昭和39年に伊東信雄氏を担当者として、発掘調査を実施した。その結果從来観音塚と呼ばれていたものが、金堂跡と推定された。昭和42年度には公有化、翌43年度には環境整備、それに伴つて観音塚中央部の調査が実施された。また、昭和51年度に推定金堂東隣り、同59年度には西隣りで発掘調査が実施され、前者では、國分尼寺に関連する遺構は検出されず、後者では、掘立柱あるいは礎石建ちの建物跡の基礎地業の跡と考えられる遺構と瓦溜めが検出されている。昭和60年度、61年度にも現在の國分尼寺地内で遺構確認調査が実施されたが、明確に陸奥國分尼寺跡に関連すると考えられる遺構は検出されなかつた。

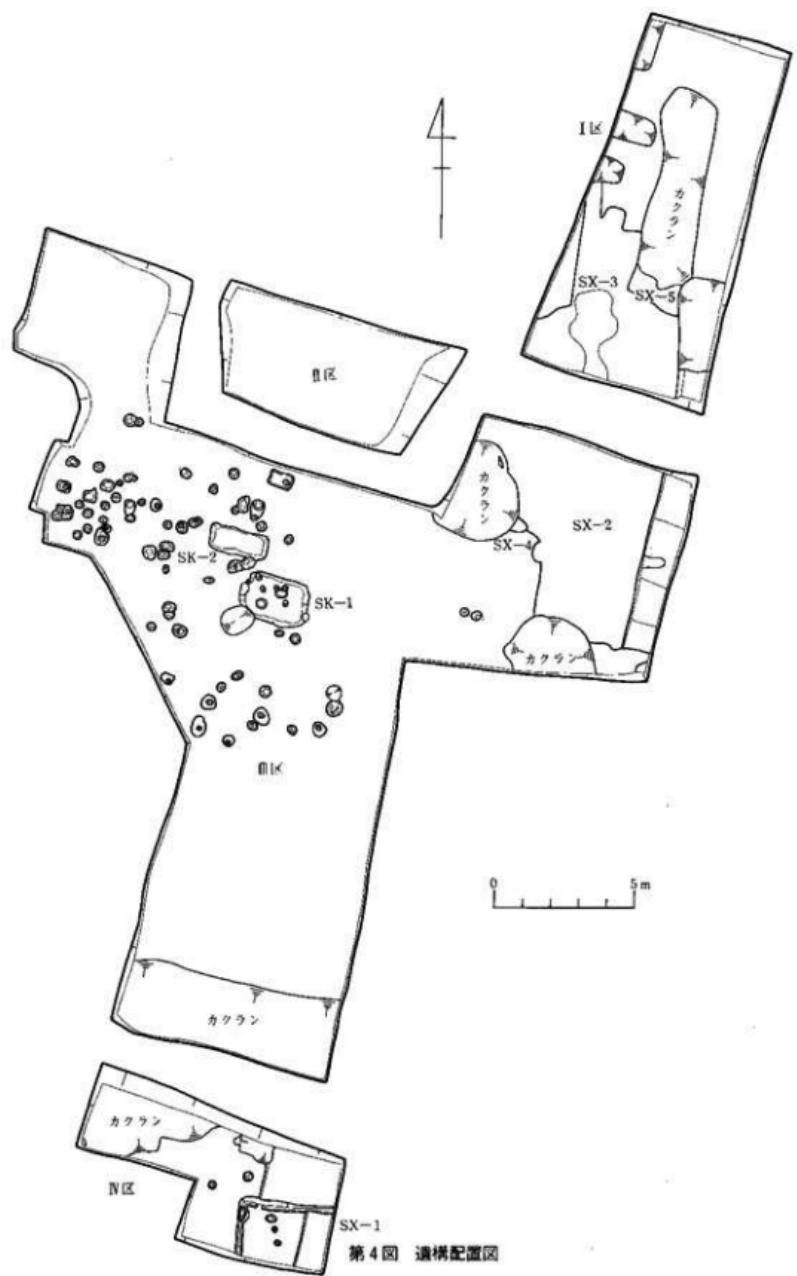
今回の調査は、國分尼寺地内東部における遺構確認調査であり、陸奥國分尼寺跡の推定中軸線の20~30m東、推定南辺を跨ぐ位置に、埋設管や排水の関係を考慮して北側からI~IV区までの4箇所設定した。面積は446m²である。調査は、昭和63年5月9日より開始した。

3. 基本層位

調査地点は、國分尼寺の庫裡及び倉庫、庭地だった部分であり、それ以前は畠地あるいは、竹林となっていたところである。調査区の西側では、庫裡建設の際になされた盛土が確認されており、樹木の抜根痕もかなり見うけられた。基本層位は第1層表土から、基底の砂礫層まで10層確認された。第1、2層は表土及び擾乱層である。第3層は黒色系のシルト層（旧表土）で調査区中央部にのみ分布する。第4層はローム漸移層、第5層以下第9層まではローム層であり、第10層は砂礫層である。第5層上面が所謂地山面であり、今回の調査の遺構検出面となっている。第5層以下は、調査区中央寄りの横乱坑の壁面で確認した。



第3図 基本層位模式図



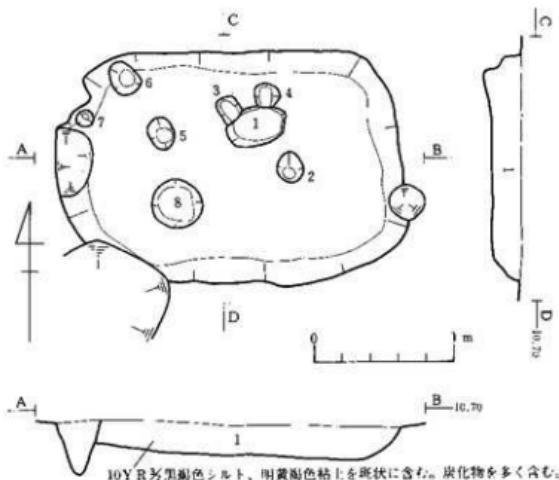
第4図 遺構配置図

4. 検出遺構

今回の調査によって検出された遺構は、土坑2基、性格不明遺構5基、小柱穴・ピット69個である。全て第5層上面で検出されている。今回の調査は、調査区を陸奥国分尼寺跡の推定南辺を跨ぐように設定したが、南辺を区画すると考えられる遺構は確認されなかった。

SK-1 土坑

調査区中央部、III区の北寄りで検出された。擾乱及び後世のピットに切られている。長軸250cm、短軸160cmの規模で梢円形あるいは隅丸長方形を呈し、深さは24cmである。堆積土は単層（墨褐色シルト）であり、多量の炭化物と、斑に明黄褐色粘土粒を含んでいる。底面は平坦であるがやや東側へ傾斜している。底面から8個のピットが検出されているが、それらの規模、配置関係に規則性はみられない。遺物は堆積土中より、丸瓦・平瓦片、中世陶器片が、ピット8より丸瓦片が出土している。

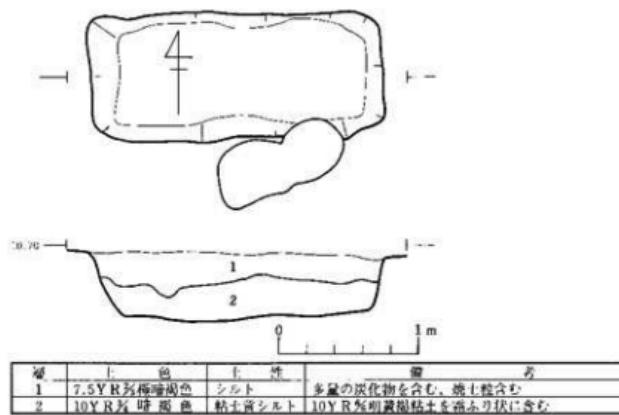


第5図 SK-1 土坑

SK-2 土坑

調査区中央部、III区の北寄り、SK-1の北西側で検出された。ピット2、3に切られ、ピット27、28、29を切っている。長軸210cm、短軸95cmの規模で、隅丸長方形を呈し、深さは45cmである。堆積土は2層に分かれ、上層には多量の炭化物、下層には霜降り状に粘土粒を含んでいる。底面は平坦である。疊層上面まで掘り込み、その面を底面としている。壁は底面から急角度で立ち上がっている。遺物は堆積土中より、丸瓦・平瓦片、中世陶器片、鉄製品が出土し

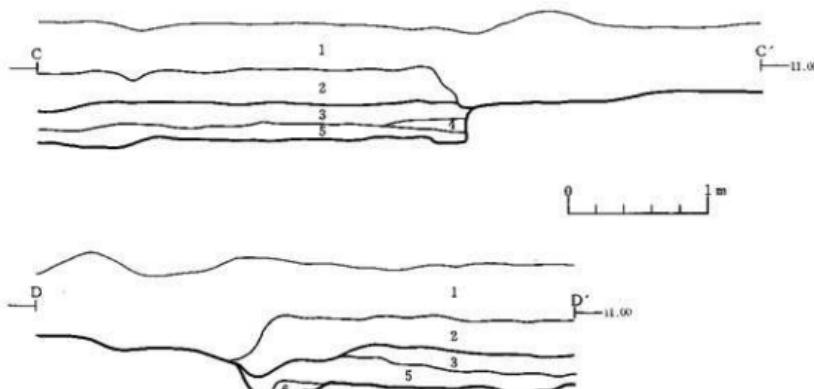
ている。



第6図 SK-2 土坑

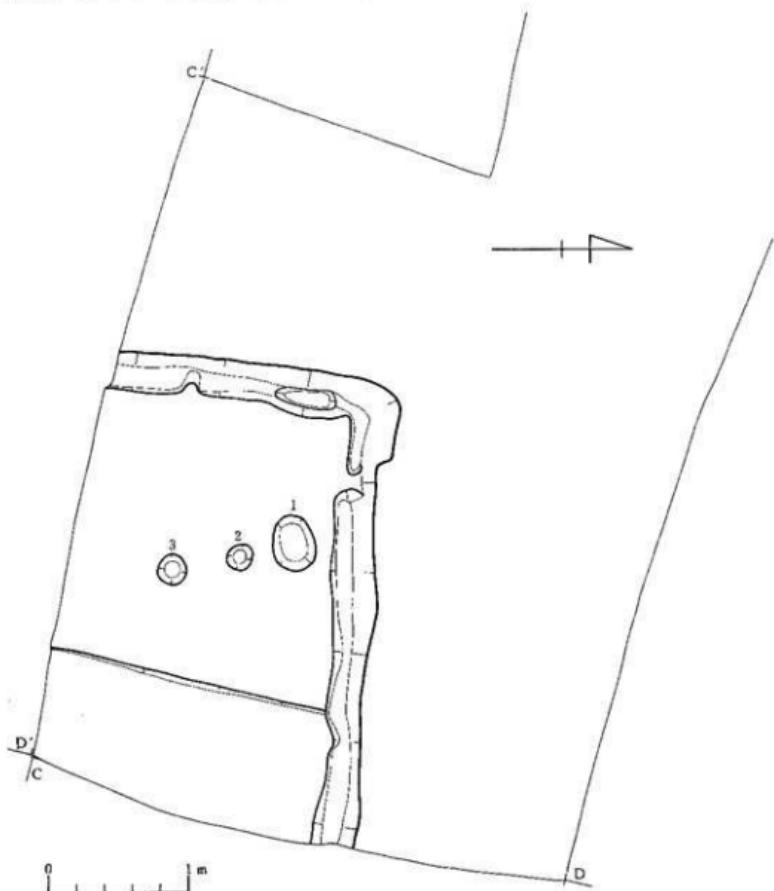
S X - 1 性格不明遺構

調査区南部のIV区南東端で検出された。南側及び東側の調査区外へ延びており、今回検出されたのはその一部であると考えられる。330cm以上×240cm以上の規模で、隅丸の方形を基調

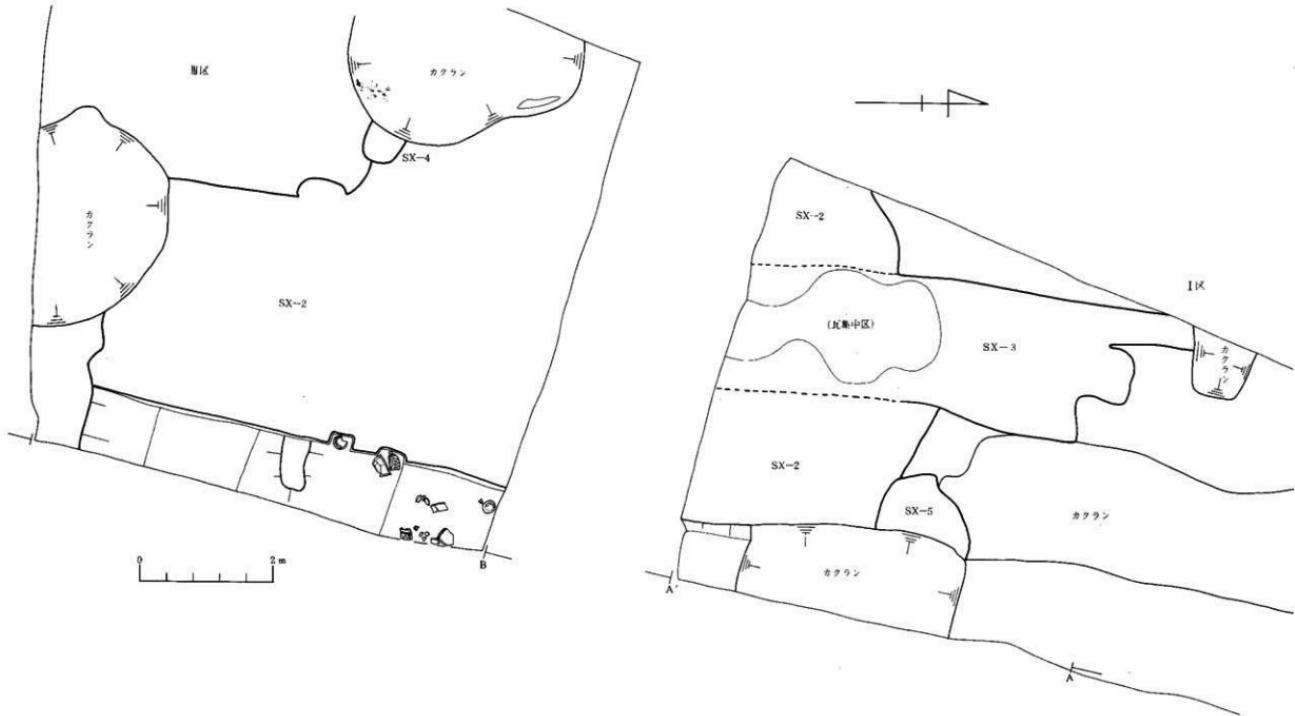


第7図 IV区断面図

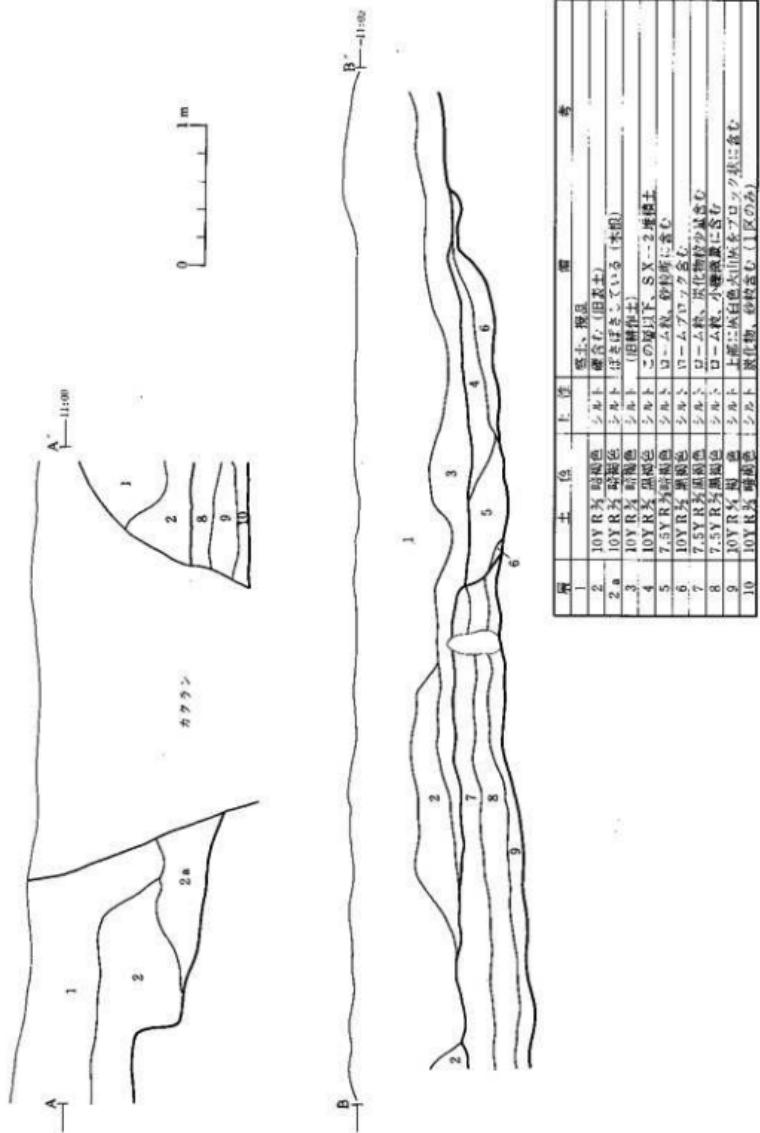
とした平面形を呈すると考えられる。深さは48cmである。西辺の軸方向はN-8°-Eである。堆積土は4層に分けられ、最上層の下部に灰白色火山灰を斑点状に含んでいる。底面は、ほぼ平坦であるが凸凹のある部分もみられる。底面から周溝及びピットが検出された。周溝は、一部途切れているが、遺構検出部分ではほぼ全周している。底面幅は7~15cm、深さ3~13cm、断面形は「U」字形で、底面レベルは北西コーナー付近が最も高く、南側及び東側へ傾斜している。ピットは3個検出されたが、その規模、配置関係に規則性はみられない。遺物は、堆積土下部及びピット3より平瓦片が出土している。



第8図 IV区 SX-1性格不明遺構



第9図 I区南部とII区北東部



第10図 I・III区東壁断面図

S X - 2 性格不明遺構

調査区東端部、I 区南部からIII区東北部に跨がって検出された。東側及び西側の調査区外へ延びており、今回検出されたのはその一部であると考えられる。遺構保存のため、一部に断面確認のトレンチを入れたのみで掘り込み精査を行なっていない。そのため、壁面及び底面の詳細については不明である。

調査区東壁沿いに入れたトレンチの状況をみると、堆積土は、南壁から3m付近を境に、南側と北側で堆積状況が異なっており、底面の状況からは、堆積土が変化する位置に対応するよう底面の盛り上がりがみられる。これらのことから、複数の遺構が重複していることも考えられるが部分的な掘り込みであり、遺構の上面検出の段階では遺構の重複は確認されず、遺物についても分離していないため、1基の遺構として記述する。

調査区内で3ヶ所の擾乱坑と、SX-3、4、5に切られている。12m×8m以上の規模であるが、平面形は不明である。確認トレンチ及び擾乱坑の壁面の状況から、深さは50cm程度であると考えられる。堆積土は7層に分けられる。6層の上部に灰白色火山灰がブロック状あるいは層状に含まれている。底面と壁面については、確認トレンチの状況から、底面に一部盛り上がる部分がある他はほぼ平坦であり、壁は底面からゆるやかに立ち上がっている。また、西側の擾乱坑の壁面で、焼け面及び焼土、炭化物が検出されている。遺物は、堆積土上面から、軒丸瓦・軒平瓦片、丸瓦・平瓦片、土師器片、須恵器片、中世陶器片、鉄製品、鐵錠、羽口片が出土している。堆積土6層から土師器坏が3点、底面から軒丸瓦4点、軒平瓦3点、平瓦・丸瓦片、土師器片が出土している。

S X - 3 性格不明遺構

調査区北東部、I 区の南側で検出された。南側の調査区外へ延びており、今回検出されたのは、その一部であると考えられる。SX-2と重複している。検出面において新旧関係は明確にできなかつたが、本遺構は遺構検出段階で極多量の瓦が出土しており、その出土状況からX-2の北壁ラインを跨ぐような状況を呈して南北方向に広がり、なおかつ南側へ傾斜をもつていてことから、SX-2を切っているものと考えられる。2m×6m以上の規模で、北側に張り出した長方形を基調とした平面形を呈すると考えられる。上面確認段階で出土した瓦を取り上げたのみで、掘り込み精査を行っていないため、その他の詳細は不明である。遺物は、軒丸瓦・軒平瓦片、丸瓦・平瓦片が多量に出土している。その他に若干の土師器片、中世陶器片もみられる。

S X - 4 性格不明遺構

調査区中央部東寄りのIII区東側で検出された。擾乱坑に切られ、SX-2を切っている。60cm×50cm以上の規模で、梢円形を基調とした平面形を呈するものと考えられる。上面確認の

みで掘り込み精査を行っていないため詳細は不明である。出土遺物はない。

SX-5 性格不明遺構

調査区東よりのI区東側で検出された。攪乱坑に切られ、SX-2を切っている。145cm以上×90cm以上の規模で、不整円形を呈するものと考えられる。上面確認のみで掘り込み精査を行っていないため詳細は不明である。出土遺物はない。

小柱穴・ピット群

I区を除く調査区のほぼ全域にピットが検出されたが、木根や後世の耕作土や盛土から掘り込まれたピットが多く、遺構と認定したピットは全体で69個である。特に調査区中央部のIII区中央部から西側にかけて集中して検出されている。直径20~50cmの円形を基調とした平面形を呈するものが多いが、方形を基調とした平面形のものもみられる。柱痕跡が確認されるものもみられ、建物跡の存在が考えられるが、小柱穴・ピット群が調査区外に広がっており、後世の耕作や抜根等による攪乱のため、柱穴の組み合わせや掘立柱建物跡の配置などは不明である。これらからの出土遺物は、軒丸瓦・軒平瓦片、丸瓦・平瓦片、土師器片、中世陶器片、鉄製品などがある。

5. 出土遺物

今回の調査で出土した遺物は、瓦、土師器、須恵器、中世陶器、近世以降の陶磁器、鉄製品、鉄滓、石製品等である。その中でも瓦が大半を占めている。しかし、完形のものはみられず、大部分は細片である。

(1) 瓦

瓦は基本層1~4層(表土として一括した。)、SX-2、SX-3を中心に多量に出土している。種類は、軒丸瓦、軒平瓦、丸瓦、平瓦、道具瓦、文字瓦、その他の瓦等である。分類については、『陸奥国分寺跡』(陸奥国分寺跡発掘調査委員会編 1961)の分類基準に準じている。

第2表 軒瓦出土表

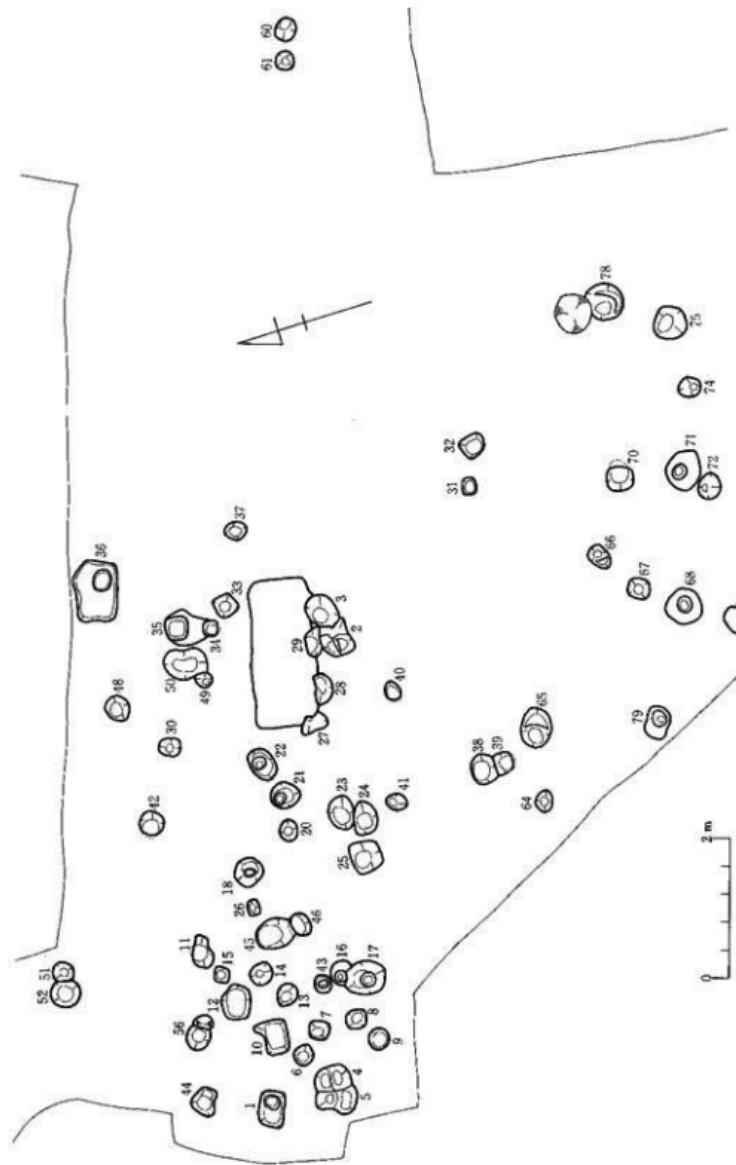
種類	分類	点数	合計	種類	分類	点数	合計
重弁蓮華文	第1類	4		重 輪 文	第1類	5	6
	第3類	3	15		第2類	1	
不明		8		偏行唐草文	第2類	7	8
第1類		1		不明		1	
細弁蓮華文	第2類	1	5	偏行唐草文	第2類	1	1
				二重 輪 文		1	1
齒車文	不明	3		不 明		8	8
不 明		1	1	合 計			24
合 計		7	28				

軒丸瓦

合計28点出土している。種類は、重弁蓮華文、細弁蓮華文、齒車文その他に瓦当面が剥落して種類の不明なものがある。

番号トモト番号 47、53、54、55、57、58、59、76、77は欠番

第11図 III区北西部ピット群



第3表 小柱穴・ピット群註記表

(半径cm)

No	掘り方	土	色	土	性	柱跡	土	色	土	性	深さ	備考
1	52×37	黒褐色(10Y R 5/6)	粘土質	シルト	—	22×20	黒褐色(10Y R 5/6)	シルト	—	48	丸瓦片出土、丸瓦片出土	
2	42×33	黒褐色(10Y R 5/6)	粘土質	シルト	—	—	—	—	—	47	P 29-2切る。瓦片片出土、炭化物含む。	
3	52×43	暗褐色(17.5 Y R 5/6)	シルト	—	—	—	—	—	—	52	S.K.-2を切る。丸瓦、平瓦片、砾石、陶製品出土。	
4	52×36	暗褐色(10Y R 5/6)	粘土質	シルト	—	—	—	—	—	52	P 30-2を切る。炭化物・粘土質含む。	
5	59×37	黒褐色(10Y R 5/6)	粘土質	シルト	—	—	—	—	—	33	丸瓦片出土、炭化物、礫土粒含む。	
6	31×30	黒褐色(10Y R 5/6)	粘土質	シルト	—	—	—	—	—	35	炭化物含む。	
7	30×26	暗褐色(10Y R 5/6)	粘土質	シルト	—	—	—	—	—	33	或し砂含む。	
8	30×27	暗褐色(10Y R 5/6)	粘土質	シルト	—	—	—	—	—	27	炭化物・粘土質含む。	
9	30×30	黒褐色(10Y R 5/6)	粘土質	シルト	—	—	—	—	—	35	炭化物・粘土粒含む。	
10	50×45	黒褐色(10Y R 5/6)	シルト	—	—	—	—	—	—	21	平瓦片出土、平瓦片出土、炭化物、礫土粒含む。	
11	41×32	暗褐色(10Y R 5/6)	粘土質	シルト	—	—	—	—	—	48	炭化物、粘土粒、粘土粒含む。	
12	30×40	黒褐色(10Y R 5/6)	粘土質	シルト	—	—	—	—	—	33	上部に砂塊、丸瓦、瓦片出土。	
13	33×30	暗褐色(10Y R 5/6)	粘土質	シルト	—	—	—	—	—	19	炭化物粘土粒含む。	
14	34×39	暗褐色(10Y R 5/6)	粘土質	シルト	—	—	—	—	—	23	炭化物・粘土粒含む。	
15	22×35	暗褐色(10Y R 5/6)	粘土質	シルト	—	—	—	—	—	13	粘土粒含む。	
16	38×28	暗褐色(17.5 Y R 5/6)	シルト	—	18×16	暗褐色(7.5 Y R 5/6)	粘土質	シルト	—	50	柱頭部に炭化物、粘土粒含む。	
17	53×48	黒褐色(10Y R 5/6)	シルト	—	21×20	暗褐色(10Y R 5/6)	シルト	—	46	P 16を切る。平瓦、丸瓦片出土。		
18	43×49	暗褐色(10Y R 5/6)	シルト	—	16×24	暗褐色(10Y R 5/6)	粘土質	シルト	—	39	掘り方に炭化物、焼土粒含む。	
20	31×28	黒褐色(17.5 Y R 5/6)	シルト	—	—	—	—	—	—	21	粘土粒含む。	
21	43×37	暗褐色(17.5 Y R 5/6)	粘土質	シルト	20×17	暗褐色(10Y R 5/6)	粘土質	シルト	—	45	平瓦片出土、粘土粒、炭化物含む。	
22	48×33	暗褐色(17.5 Y R 5/6)	粘土質	シルト	20×18	暗褐色(7.5 Y R 5/6)	シルト	—	32	粘土粒、炭化物含む。		
23	50×53	黒褐色(10Y R 5/6)	シルト	—	—	—	—	—	49	—		
24	48×34	暗褐色(17.5 Y R 5/6)	シルト	—	—	—	—	—	36	鉄製品出土、粘土粒、炭化物含む。		
25	48×46	黒褐色(10Y R 5/6)	粘土質	シルト	—	—	—	—	35	粘土粒、炭化物含む。		
26	24×18	暗褐色(10Y R 5/6)	粘土質	シルト	—	—	—	—	25	粘土粒、炭化物含む。		
27	40×22	暗褐色(10Y R 5/6)	シルト	—	—	—	—	—	37	S.K.-2を切る。炭化物含む。		
28	45×35	暗褐色(10Y R 5/6)	粘土質	シルト	—	—	—	—	45	S.K.-2を切る。平瓦片出土、炭化物、粘土粒含む。		
29	40×20	暗褐色(7.5 Y R 5/6)	シルト	—	—	—	—	—	45	S.K.-2を切るP 20より切られる。粘土粒含む。		
30	32×26	暗褐色(10Y R 5/6)	シルト	—	—	—	—	—	27	平瓦片出土、炭化物含む。		
31	27×23	暗褐色(10Y R 5/6)	シルト	—	—	—	—	—	38	瓦片出土、炭化物含む。		
32	36×32	暗褐色(10Y R 5/6)	粘土質	シルト	—	—	—	—	37	炭化物、粘土粒含む。		
33	22×31	暗褐色(20Y R 5/6)	シルト	—	—	—	—	—	25	丸瓦片出土、炭化物、粘土粒含む。		
34	21×20	暗褐色(10Y R 5/6)	粘土質	シルト	—	—	—	—	31	瓦片出土、炭化物、焼土、粘土粒含む。		
35	33×33	暗褐色(10Y R 5/6)	シルト	—	—	—	—	—	40	炭化物、焼土粒、粘土粒含む。		
36	38×63	黒褐色(10Y R 5/6)	シルト	—	32×25	暗褐色(17.5 Y R 5/6)	シルト	—	13	丸瓦片出土、炭化物、粘土粒含む。		
37	33×25	暗褐色(10Y R 5/6)	シルト	—	—	—	—	—	24	—		
38	42×31	暗褐色(10Y R 5/6)	シルト	—	—	—	—	—	25	粘土粒含む。		
39	31×27	暗褐色(10Y R 5/6)	シルト	—	—	—	—	—	26	瓦片出土、炭化物、粘土粒含む。		
40	26×23	黒褐色(10Y R 5/6)	粘土質	シルト	—	—	—	—	25	粘土粒含む。		
41	33×25	暗褐色(10Y R 5/6)	シルト	—	—	—	—	—	26	炭化物含む。		
42	25×35	暗褐色(10Y R 5/6)	シルト	—	—	—	—	—	38	炭土粒、炭化物、粘土粒含む。		
43	26×24	暗褐色(10Y R 5/6)	シルト	—	16×12	暗褐色(10Y R 5/6)	シルト	—	43	炭化物、粘土粒含む。		
44	40×37	暗褐色(10Y R 5/6)	シルト	—	—	—	—	—	28	平瓦片出土。		
45	56×41	黒褐色(10Y R 5/6)	粘土質	シルト	—	—	—	—	34	平瓦片出土、炭化物、粘土粒含む。		
46	36×17	暗褐色(10Y R 5/6)	シルト	—	—	—	—	—	36	P 45を切る。炭化物、粘土粒含む。		
47	39×34	黒褐色(10Y R 5/6)	シルト	—	—	—	—	—	42	瓦片出土、粘土粒含む。		
48	23×21	暗褐色(10Y R 5/6)	シルト	—	—	—	—	—	29	P 56を切る。		
50	60×12	暗褐色(7.5 Y R 5/6)	シルト	—	—	—	—	—	28	平瓦、瓦片出土、炭化物、焼土粒、粘土粒含む。		
51	29×27	暗褐色(10Y R 5/6)	シルト	—	—	—	—	—	42	P 52を切る。瓦片出土、炭化物含む。		
52	43×38	黒褐色(10Y R 5/6)	粘土質	シルト	—	—	—	—	32	炭化物、粘土粒含む。		
53	34×34	暗褐色(10Y R 5/6)	シルト	—	—	—	—	—	32	炭化物、粘土粒含む。		
60	33×29	暗褐色(10Y R 5/6)	シルト	—	—	—	—	—	39	多量の炭化物、粘土粒含む。		
61	38×25	暗褐色(10Y R 5/6)	シルト	—	—	—	—	—	41	平瓦片出土、粘土粒含む。		
62	28×27	黒褐色(10Y R 5/6)	粘土質	シルト	—	—	—	—	17	粘土粒含む。N区		
63	37×31	黒褐色(10Y R 5/6)	シルト	—	—	—	—	—	40	砂粒少量含む。N区		
64	31×25	暗褐色(10Y R 5/6)	シルト	—	—	—	—	—	25	炭化物、燒土、粘土粒含む。		
65	56×44	暗褐色(10Y R 5/6)	シルト	—	—	—	—	—	47	平瓦片出土、炭化物、燒土粒、粘土粒含む。		
66	38×26	暗褐色(10Y R 5/6)	シルト	—	—	—	—	—	34	土師瓦片出土、粘土粒含む。		
67	32×59	暗褐色(10Y R 5/6)	シルト	—	—	—	—	—	26	炭化物、粘土粒含む。		
68	53×32	暗褐色(10Y R 5/6)	シルト	—	22×22	暗褐色(10Y R 5/6)	シルト	—	23	炭化物、粘土粒含む。		
69	75×52	暗褐色(10Y R 5/6)	シルト	—	15×15	暗褐色(10Y R 5/6)	粘土質	シルト	—	36	炭化物、粘土粒含む。	
70	37×37	暗褐色(10Y R 5/6)	シルト	—	—	—	—	—	38	炭化物、粘土粒含む。		
71	59×52	暗褐色(7.5 Y R 5/6)	シルト	—	22×20	暗褐色(10Y R 5/6)	粘土質	シルト	—	56	平瓦片出土、炭化物、粘土粒、燒含む。	
72	36×32	暗褐色(10Y R 5/6)	シルト	—	—	—	—	—	36	炭化物、粘土粒含む。		
73	38×38	暗褐色(10Y R 5/6)	シルト	—	18×17	暗褐色(10Y R 5/6)	シルト	—	33	粘土粒含む。		
74	33×33	黒褐色(10Y R 5/6)	シルト	—	—	—	—	—	41	瓦片出土、炭化物、燒含む。		
75	47×47	暗褐色(10Y R 5/6)	シルト	—	—	—	—	—	53	炭化物、粘土粒、燒含む。		
76	51×46	暗褐色(10Y R 5/6)	シルト	—	—	—	—	—	44	平瓦、丸瓦片出土、粘土粒含む。		
77	47×32	暗褐色(10Y R 5/6)	粘土質	シルト	—	—	—	—	29	瓦片、中空陶器片出土。		

重弁蓮華文軒丸瓦（第12図1～6）は、破片も含めて15点出土している。分類可能なものは7点あり、第1類が4点、第3類が3点である。F-2、3（第12図2、3）は、第1類で、SX-2の底面から出土している。第1類は、花弁の弁端が盛り上がり、中房上の蓮子が1個の珠文を中心に4個の小花弁状のものが十字形に配されている。これらは、同範であると考えられ、瓦当直径は各々20.7cm、21.7cmである。F-1（第12図1）は、第3類でIV区の表土から出土している。第3類は、第1類と類似するが、中房が著しく突出し、中房上の蓮子が5個共円形になっている。また、蓮子を結ぶ線の延長は、蓮弁の中心線ではなく、蓮弁と蓮弁との間の線と一致している。瓦当直径は、20.5cmである。

細弁蓮華文軒丸瓦（第12図7、8）は、破片を含めて5点出土している。F-7（第12図7）は、外区は欠落しているが第1類と思われる。12葉の細い花弁、中央に二重輪郭による内区を有し、その中央に蓮子を1個配している。F-8（第12図8）は、外区の珠文の間隔、花弁の間隔から、外区に21個の珠文を配し、20葉の細い花弁を有する第2類であると考えられる。

歯車文軒丸瓦（第12図9）は、1点のみピット1から出土している。8個の舌状の文様が歯車状に並び、中央に大型の蓮子が配されている。瓦当直径は18cmである。

軒平瓦

合計24点出土している。種類は、重弧文、偏行唐草文、均整唐草文、三重波文、その他に瓦当面が剥落して種類の不明なものがある。

重弧文軒平瓦（第13図11～15、第14図23）は、破片を含めて6点出土している。G-1～5（第13図1～5）は、第1類で、SX-2の底面及び堆積土中から出土している。瓦当面に二重の太い沈線が描かれ、頸部は深頸で、2本の太い平行沈線と、山形文が描かれている。頸部末端の平行沈線は、山形文より先行して描かれている。G-1、2、4の凸面には平行叩き目が施されている。G-13（第14図23）は、第2類で、瓦当面の文様は第1類と同様であるが、頸面に山形文の代わりに、太い沈線による唐草文が描かれている。

偏行唐草文軒平瓦（第13図16～18、第14図19～21）は、破片を含めて8点出土している。小破片1点を除いて、全て第2類である。溝状に左から右に走る唐草文を太い隆線で表わし、その上下に細い隆線でつづられた珠文を配している。頸部は深頸で無文である。G-10頸部凸面にはおよそ6cmの幅で朱が付着しているのが認められる。

均整唐草文軒平瓦（第14図22）は、1点のみSX-2の堆積土中から出土している。第2類である。瓦当面の唐草文は、陰刻か陽刻かはっきりしない。頸は有段で、繩叩き目の後スリケシが施されている。

三重波文軒平瓦（第14図24）は、1点のみSX-2の堆積土中から出土している。沈線による三重の波文が施されている。頸は有段で、繩叩き目の後にスリケシが施されている。

その他に、G-15、16（第14図25、26）のように、瓦当面は剥落しており、種類は不明であるが、頸部に横位の繩叩き目後に、丸味を帯びた籠状の工具による波状文が描かれているものがある。また、G-15の瓦当面剥落部分に繩叩き目がみられる他、瓦当面剥落部分に格子状に沈線が施されているものもみられる。

丸瓦

丸瓦（第15図、16図）は、小破片も含めて多量に出土している。全て玉縁付の有段丸瓦であり、玉縁の付かない行基瓦はみられない。粘土紐桶巻き作りであり、粘土紐の幅は2～4.5cmのものがある。凸面には、繩叩きの後、ほぼ全面にナデ調整あるいはロクロナデ調整が施されている。凹面には、全点布目痕がみられ、粘土紐の痕跡もみられる。布の合わせ目や、紐の圧痕がみられるものがあり、中には、それらをナデ消しているものもある。玉縁部も筒部と同じ調整がみられる。筒部と玉縁部は一体として作られ、粘土紐の太さの違いによって、玉縁部の段をつくり出していたものと、筒部に粘土を加えて段をつくり出したものが認められるようである。側面と小口面にはヘラケズリが施されている。F-11（第15図27）は、軒丸瓦の瓦当部が剥落したものであるが、筒部の先端中央部に、繩あるいは葉のような植物の圧痕がみられる。これは、軒丸瓦の項では触れなかったが、重弁蓮瓣文軒丸瓦の同部分にも観察される。また、F-20（第15図29）の凸面中央部に「伊」の刻印文字がみられる。

平瓦

平瓦（第17～19図）は、出土遺物中、小破片も含めて最も多量に出土している。凹面に模骨痕がみられ、桶巻き作りであることが判るものもある。凸面は、縦方向に繩叩きされているものが多いが、斜方向のもの、横方向のものもみられ、それらをスリケシしているものもある。また、繩叩き目の他に、平行叩き目や平行叩きの後に一部スリケシしているものやG-33（第25図85）のような格子叩き目のもの^{註)}、全体にナデ調整されて叩きの不明なもの、布目の痕跡がみられるものがある。凹面は、目の細い布目が多く、全体的にスリケシされたものが多いが、粗い布目のもの、スリケシされていないものもみられる。また、糸切り痕が放射状に残っているものもある。側面と小口面にはヘラケズリが施されている。G-17（第17図37）は、内面に他の瓦を乗せる台にした際に付いたと思われる痕跡様のものが見られることから、焼台に使用したものである可能性もある。また、G-24（第19図34）は、凹面中央部に「物」の刻印文字がみられる。

註) この「格子叩き目」については、「稜妻状叩き目」という呼称で用いられる場合もある。

道具瓦

熨斗瓦（第20図45～47、21図48）は、SX-2から1点、SX-3から3点の計4点出土している。凸面は繩叩き、凹面は布目で、一部あるいは全体をスリケシしている。H-2（第20図46）を

除いて糸切り痕が残っている。また、H-3（第20図47）は、片側面に切り放しの痕跡がみられ、平瓦を焼成以前に分割したものである。他の3点は、両側面ともにヘラケズリが施されている。

隅平瓦（第21図49～51）は、SX-2から2点、SX-3から1点の計3点出土している。いずれも平瓦の隅を焼成以前に切り落したものである。凸面は、H-5（第21図49）は、全面スリケシ、6（同50）は、平行叩き目、7（同51）は、繩叩き目が交叉している。凹面は各々布目をスリケシしており、特にH-5は全面がスリケシされている。H-5、6は、各々左隅を切っており、先端の角度は、40°及び37°程度と推定される。H-7は、右隅を切っているが左側面の端部付近にもケズリ調整を入れている。先端の角度は63°である。

文字瓦

文字瓦は、SX-2から6点、SX-3から8点、表土から2点の合計16点が出土している。文字のあらわし方には、刻印を押したもの、指先で書いたもの、箋状工具で書いたものの、3種類がある。

刻印文字瓦（第15図29、第19図44、第22図52～61、63）は14点出土しており、判読できるのは、図示した12点である。「物」、「丸」、「田」、「占」、「伊」の5種類がある。刻印されている瓦には、平瓦と丸瓦がある。平瓦では凸面、凹面の両面に刻印されている。G-24～28（第19図44、第22図52～55）は、凹面に「物」と刻印されており、各々同範であると考えられる。G-29～31（第22図56～58）は、凹面に「丸」と刻印され、G-29、30は同範であると考えられる。凸面に刻印されたものは、剥落のため判読できない。丸瓦では、箋部凸面に刻印されており、凹面、玉縁部に刻印されたものはなかった。F-20、21（第22図59、60）は、「田」と刻印され、同範であると考えられる。F-23（第22図61）、F-20（第22図63は第15図29の部分）は、各々「占」、「伊」が刻印されている。

指書文字瓦は、1点のみ出土している。平瓦の凹面に指書きされているが、判読不明であるため図示していない。

箋書文字瓦は、1点のみ出土している。平瓦の凹面に箋状工具によって書かれている。「大」あるいは「木」かと思われるが判定できない。

その他の文様瓦

丸瓦の凸面に箋状の工具で沈線が施されているものである。破片であり、断片的なものであるが、F-25（第22図64）は、平行沈線と、それぞれに直交する沈線で「十」と書かれている。また図示していないが、平行沈線と、それに直交する沈線で「+」と書かれたものがある。

その他の瓦

その他の瓦は、表土から出土している。軒丸瓦 F-10（第12図10）は、瓦当面に右巻きの巴文と、巴文の周辺をとりまく連珠がみられる。その他、図示していないが、F-10と同様の巴文軒

丸瓦片・丸瓦・平瓦片が出土している。これらの瓦は、焼し瓦であり、黒色あるいは、銀色を呈している。その特徴から近世以降の瓦であると考えられる。国分尼寺が曹洞宗に転宗した以降のものであると考えられる。

(2) 土師器

土師器は、基本層1～4層（表土として一括した。）、SX-2、SX-3、ピット等から出土している。出土量は少なく、図示したのは、SX-2から出土した2点のみである。（第23図76）は、壺で底部から体部下半にかけて残存している。内外面ともロクロ調整が施されており、底部の切り離しは回転糸切りによるもので、切り離し後は無調整である。（第23図77）は、壺で体部はやや内窓しながら外傾し、口縁部で若干外反している。底部の切り離しは、回転糸切りによるもので、切り離し後は無調整である。その他に、壺、高台付壺、甕、把手などがある。全て小破片であるが、磨滅して不明なもの以外は、全て成形時にロクロを使用したものであり、壺では、内面にヘラミガキ、黒色処理が施されているものもみられる。

(3) 須恵器

須恵器は、基本層1～4層（表土として一括した。）、SX-2から出土している。出土量は少なく、図示したものはない。甕あるいは壺の体部及び蓋の宝珠つまみがある。

(4) 中世陶器

中世陶器は、基本層1～4層（表土として一括した。）、SK-1、SK-2、SX-2、SX-3、ピット等から出土している出土量が少なく、甕、壺、練り鉢があるが、全て破片である。大部分が県内産のもので、常滑産のものが1点だけ認められた。県内産の甕（第24図78、79）の2点は同一個体であると考えられる。また、常滑産の甕片（第24図81）には、押印がみられる。年代的には、13世紀から14世紀、鎌倉から南北朝期のものであると考えられる。

(5) 近世陶磁器

近世の陶磁器には、陶器、磁器、カワラケ、瓦質七器等がある。全て基本層1、2層（表土として一括した。）から出土している。瓦以外の出土遺物の中では最も出土量が多くなっている。図示したものは、13点である。陶器及び磁器には碗（第23図65～70）、皿（同71～73）がある。产地は相馬及び肥前のものがある。年代的には、およそ18世紀頃のものであると考えられる。カワラケは、2点図示した（第23図74、75）。内外面ともロクロ調整が施されている。底部は、74は回転ヘラケズリが施され、75は回転糸切り痕がある。瓦質土器は、擂鉢2点を図示した（第24図83、84）。83は6本単位の筋目があり、84は片口が付けられ、7本単位の筋目が付けられている。年代的には近世以降であると思われる。

(6) 鉄製品・鉄滓

鉄製品はSK-2、SX-2、ピット等から出土している。6点出土しており、刀子、釘など

であると考えられるが鋳造が著しく詳細は不明であり、図示していない。その他、SX-2出土のもので、鉄の板状のものが重なった状態で錫びついたものがある。錫滓はSX-2からまとめて出土している。錫治滓であると考えられ、純重量は5122gである。これらの錫滓は、その形状から錫形滓と呼ばれるものであり、木炭の痕跡や、小礫、窓壁の一部と考えられる粘土等が付着しているものもみられる。また、羽口の破片も出土している。

(7) 石製品

ピット及び表土から各々1点づつ砾石が出土している。破損品であり、時期の特定も困難であり、図示していない。

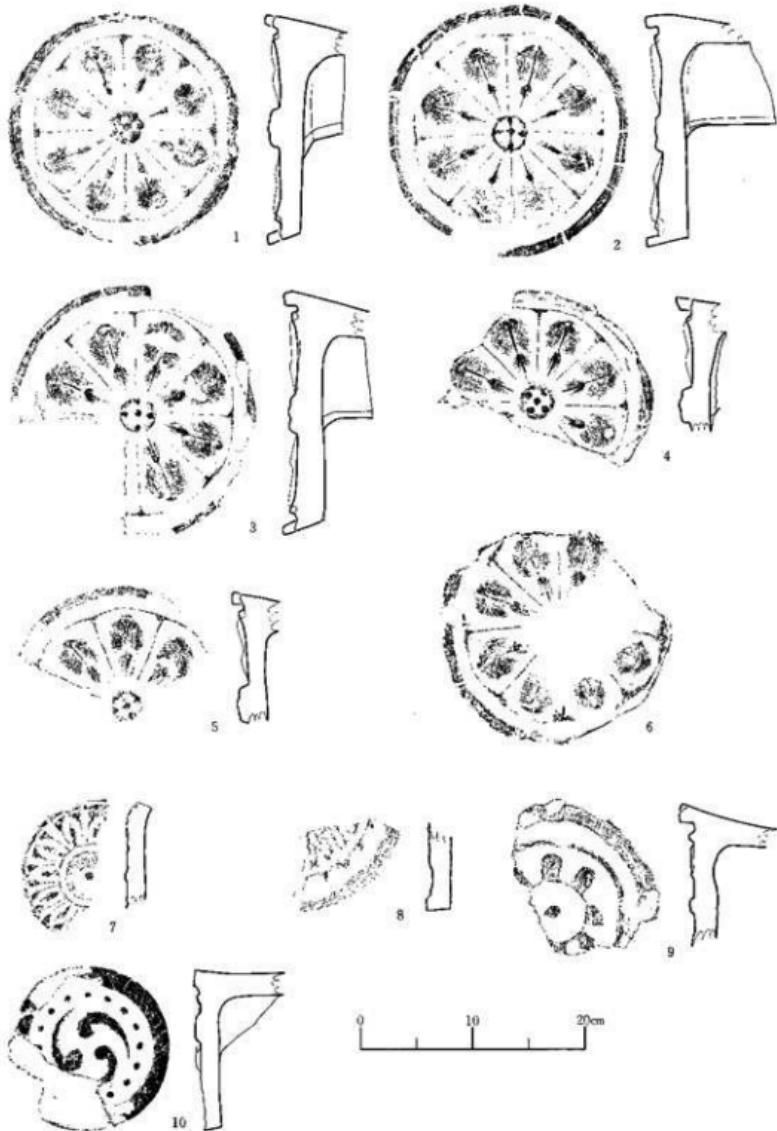
6. まとめ

1. 今回の調査では、古代まで遡ると考えられる遺構は、SX-2不明遺構1基のみであり、他の遺構については、中世あるいは近世以降のものであると考えられる。特に小柱穴・ピット群については、古代の陸奥国分尼寺倒壊後の建物跡であることが考えられる。また、SX-2不明遺構からは、多量の錫滓や、羽口片などが出土し、付近に錫冶に関連する遺構が存在していることが考えられる。

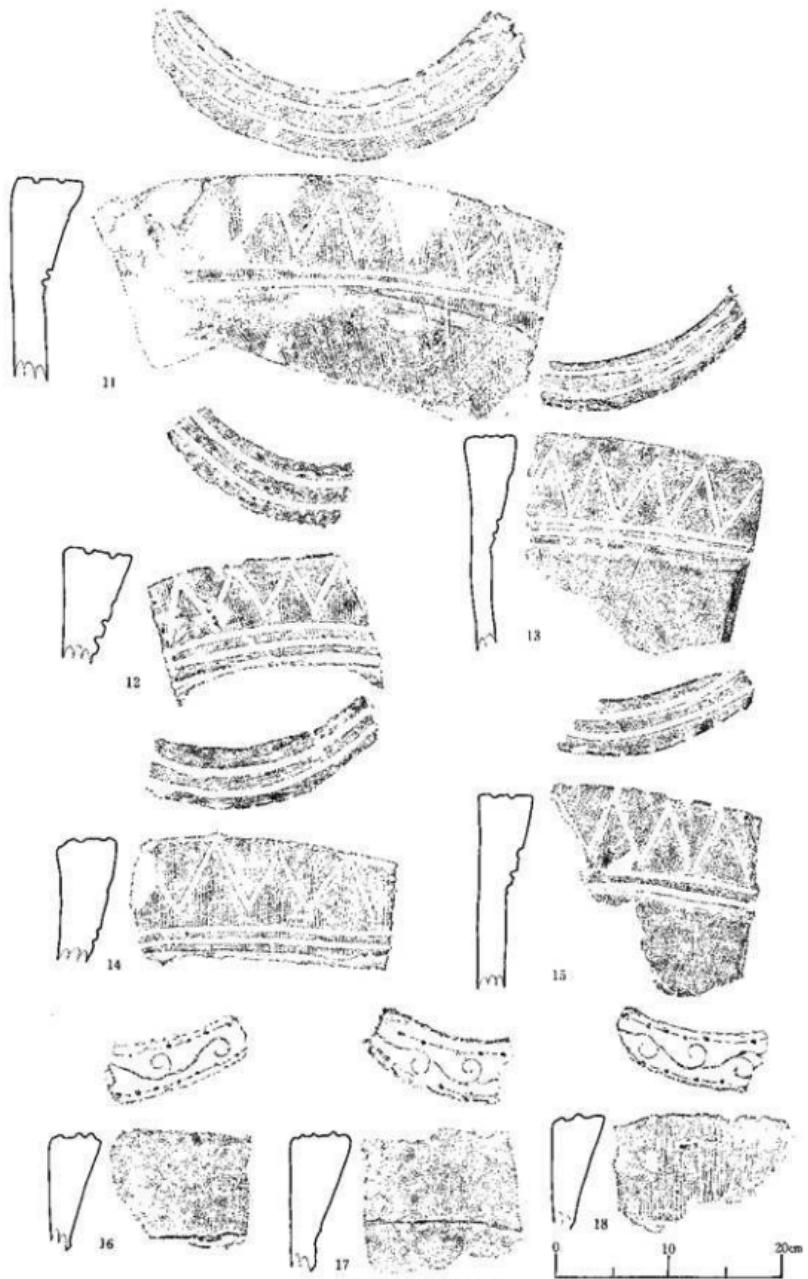
2. 当初想定されていた、陸奥国分尼寺の南辺を区画すると考えられる遺構は、今回の調査では検出されなかった。このことから、陸奥国分尼寺の伽藍配置はもとより、明らかになっていない寺域範囲についても、再度検討しなおす必要があると考えられる。これらを今後の課題とし、著しい都市化によって、ますます発掘調査の実施が困難な状況になる本遺跡周辺地区においては、計画的に調査を進めて行くことが急務であると考えられる。

引用・参考文献

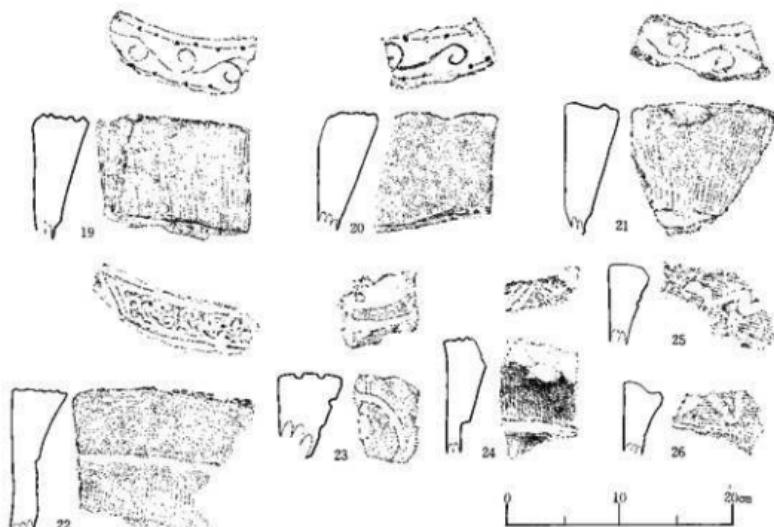
- 仙台市教育委員会 1969 「史料陸奥國分尼寺跡堆積整備並びに調査報告書」仙台市文化財報告書第4集
陸奥國分寺跡発掘調査委員会編 1961 「陸奥國分寺跡」
宮城県教育委員会・宮城県多賀城跡調査研究所 1980 「多賀城跡 政府跡図録編」
宮城県教育委員会・宮城県多賀城跡調査研究所 1982 「多賀城跡 政府跡本文編」
佐賀県立九州陶磁文化館 1984 「国内出土の肥前陶磁」
仙台市教育委員会 1984 「史料陸奥國分寺跡 昭和58年度環境整備予備調査報告 東大門跡東脇築地跡」仙台市文化財調査報告書第63集
仙台市教育委員会 1985 「仙台平野の遺跡群IV—昭和59年度発掘調査報告」仙台市文化財調査報告書第75集
仙台市教育委員会 1986 「仙台平野の遺跡群V—昭和60年度発掘調査報告」仙台市文化財調査報告書第87集
仙台市教育委員会 1987 「仙台平野の遺跡群VI—昭和61年度発掘調査報告」仙台市文化財調査報告書第97集



第12図 軒丸瓦



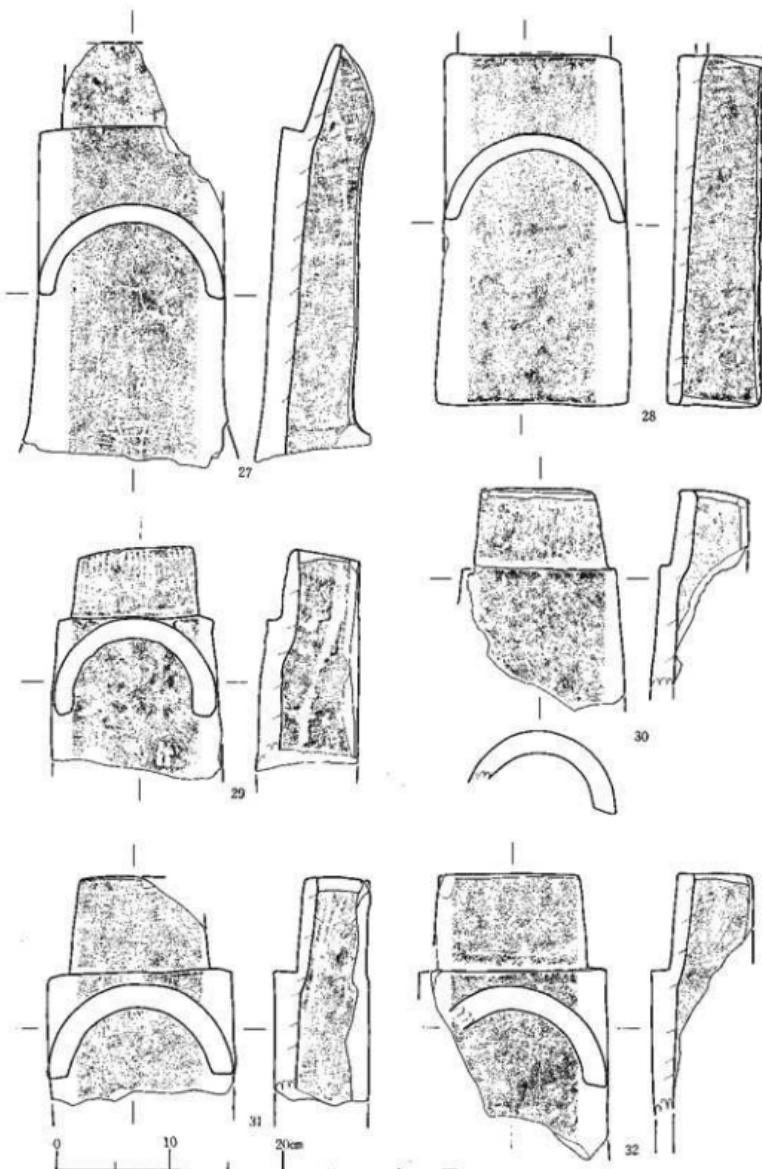
第13図 軒平瓦 I



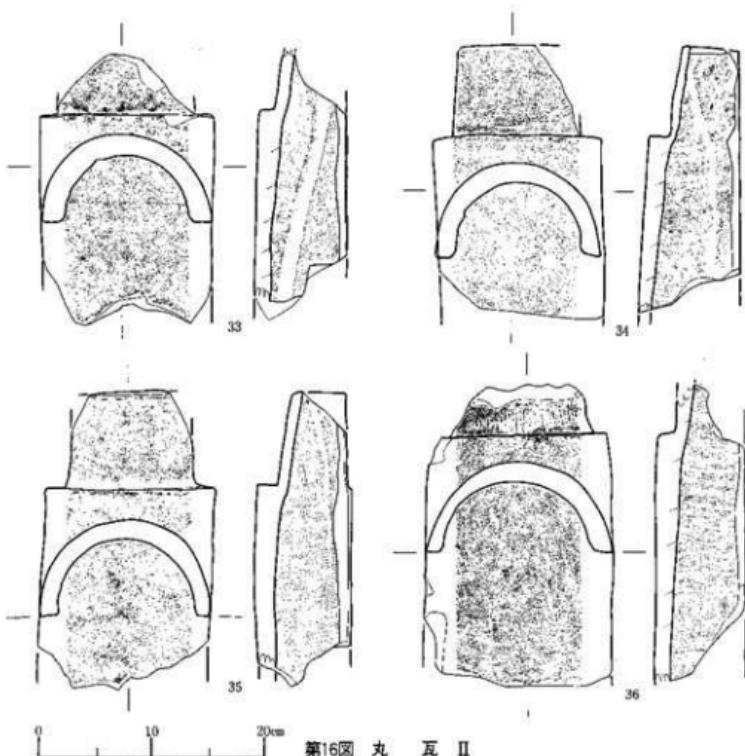
第14図 軒平瓦 II

表4 軒丸瓦、軒平瓦観察表

図版番号	種類	特徴	地所・遺構・層位	写真回数・登錄番号
12-1	軒丸瓦	重井基準文第3類	Ⅵ区 表土	11-1 F-1
12-2	軒丸瓦	重井基準文第1類	SX-2 底面	11-2 F-2
12-3	軒丸瓦	重井基準文第1類	SX-2 底面	11-3 F-3
12-4	軒丸瓦	重井基準文第3類	SX-2 1層	11-4 F-4
12-5	軒丸瓦	重井基準文第1類	SX-2 6層	11-5 F-5
12-6	軒丸瓦	重井基準文第1類	SX-2 底面	11-6 F-6
12-7	軒丸瓦	重井基準文第1類	SX-2 1層	12-1 F-7
12-8	軒丸瓦	重井基準文第2類	SX-3 1層	12-2 F-8
12-9	軒丸瓦	他卑文	Pit 1 1層	12-3 F-9
12-10	軒丸瓦	二巴文・近壁	Ⅵ区 表土	12-4 F-10
13-11	軒平瓦	重井文第1類。頭部に山形文と2本平行線	SX-2 底面	13-1 G-1
13-12	軒平瓦	重井文第1類。頭部に山形文と2本平行線	SX-2 底面	13-2 G-2
13-13	軒平瓦	重井文第1類。頭部に山形文と2本平行線	SX-2 6層	13-3 G-3
13-14	軒平瓦	重井文第1類。頭部に山形文と2本平行線	SX-2 5層	13-4 G-4
13-15	軒平瓦	重井文第2類。頭部に山形文と2本平行線	SX-2 底面	14-1 G-5
13-16	軒平瓦	偏行唐草文第2類	SX-2 1層	14-2 G-6
13-17	軒平瓦	偏行唐草文第2類	表土	14-3 G-7
13-18	軒平瓦	偏行唐草文第2類	SX-2 1層	14-4 G-8
14-19	軒平瓦	偏行唐草文第2類	Ⅵ区 Pit10	15-1 G-9
14-20	軒平瓦	偏行唐草文第2類	Ⅵ区 表土	15-2 G-10
14-21	軒平瓦	偏行唐草文第2類	Ⅵ区 表土	15-3 G-11
14-22	軒平瓦	頭部唐草文第2類	SX-2 1層	15-4 G-12
14-23	軒平瓦	重井文第2類。頭部二唐草文	Ⅵ区 表土	16-1 G-13
14-24	軒平瓦	三重波文	SX-2 1層	16-2 G-14
14-25	軒平瓦	頭部に波状文	SX-2 1層	16-3 G-15
14-26	軒平瓦	頭部に波状文	SX-2 1層	16-4 G-16



第15図 丸 瓦 I



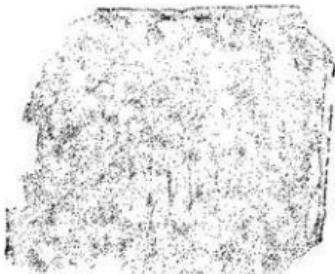
第16図 丸 瓦 II

表5 丸瓦観察表

回収番号	種類	特徴	地区・遺構・層位	写真回数・分類番号
15-27	軒丸瓦	瓦当部がとれている。粘土縫隙巻き作り。凹面に絆はび	SX-2 1層	16-5 F-11
15-28	丸瓦	粘土縫隙巻き作り	SX-2 1層	16-6 F-12
15-29	丸瓦	馬印又字丸「伊」。凹面に絆はび	SX-2 1層	16-7 F-20
15-30	丸瓦	粘土縫隙巻き作り	SX-2 1層	16-8 F-19
15-31	丸瓦	粘土縫隙巻き作り。凹面に絆はび	SX-2 1層	17-1 F-18
15-32	丸瓦	粘土縫隙巻き作り	SX-3 1層	17-2 F-17
16-33	丸瓦	粘土縫隙巻き作り。凹面の絆はびナメ消し	SX-3 1層	17-3 F-16
16-34	丸瓦	粘土縫隙巻き作り。凹面に絆はび	SX-3 1層	17-4 F-15
16-35	丸瓦	凹面に粘土の土模	SX-3 1層	17-5 F-14
16-36	丸瓦	粘土縫隙巻き作り	SX-2 1層	17-6 F-13



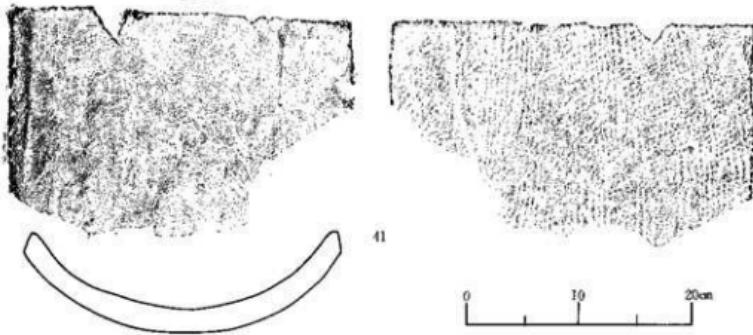
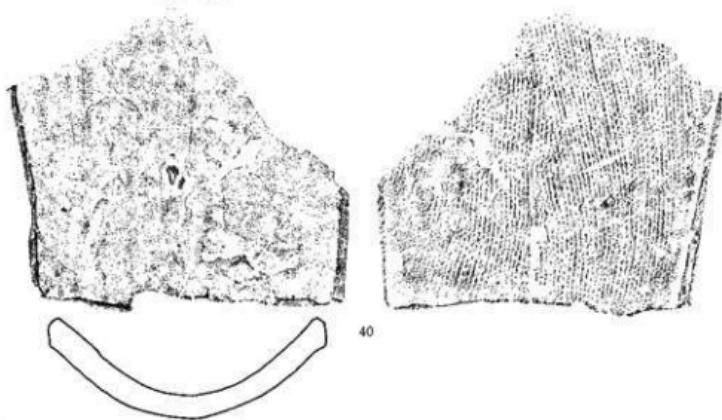
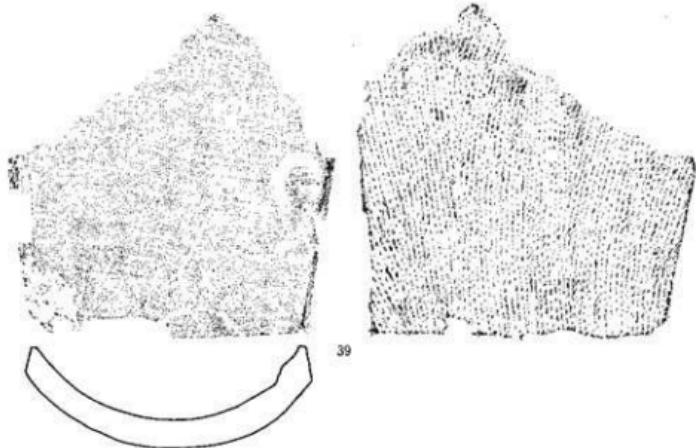
37



38

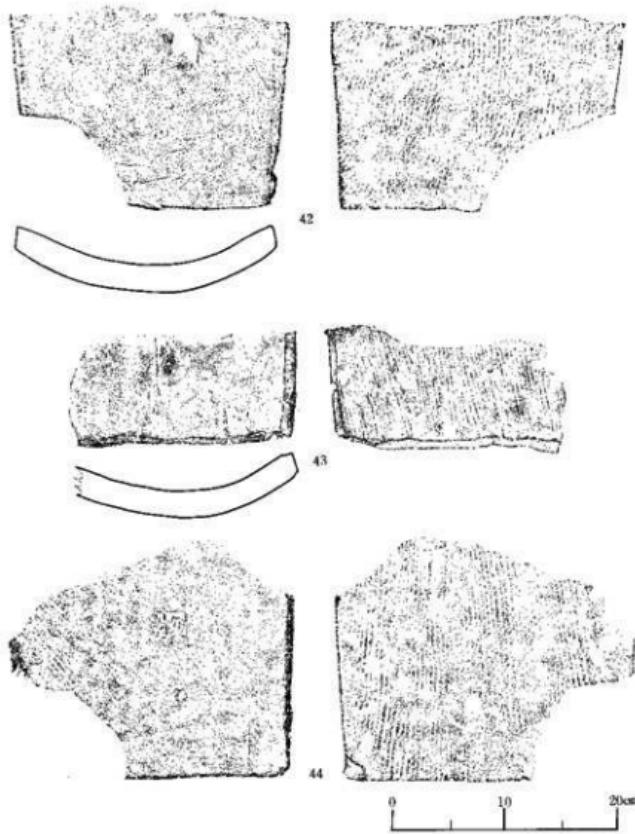


第17図 平 瓦 I



第18図 平 瓦 II

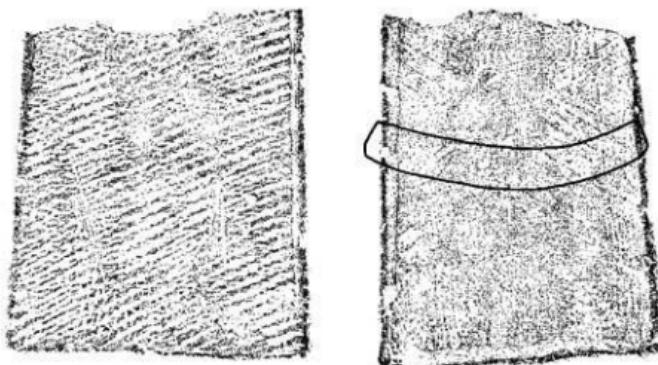
0 10 20cm



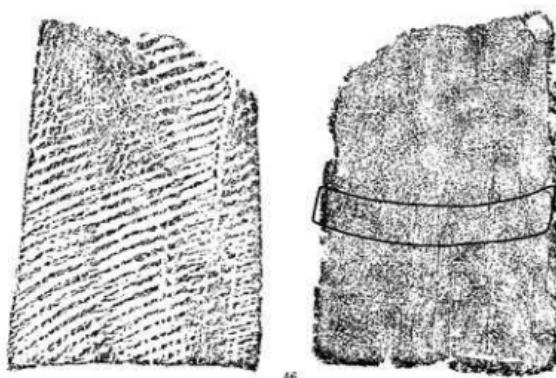
第19図 平 瓦 III

表6 平瓦観察表

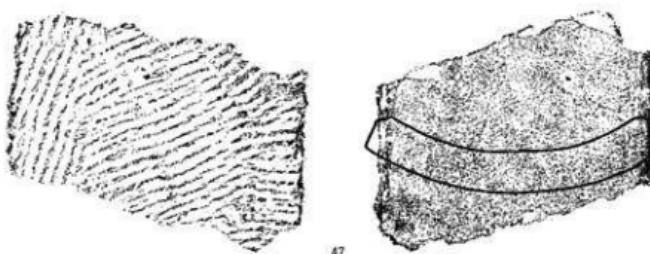
目次番号	種類	特徴	地区・遺構・層位	当直試版・登録番号
17-37	平 瓦	長軸36cm、凹面布目スリ溝なし、焼台に使用か	S X - 2	1層 18-1 G-17
17-38	平 瓦	凹面に糸切痕、布目はつきりせず	S X - 3	1層 18-2 G-18
18-39	平 瓦		S X - 2	2層 18-3 G-19
18-40	平 瓦		S X - 3	1層 18-4 G-20
18-41	平 瓦	凹面布目スリ溝なし	S X - 3	1層 18-5 G-21
19-42	平 瓦	凹面布目削耗して不明	S X - 2	1層 18-6 G-22
19-43	平 瓦	凸面に平行印字、凹面に糸切痕、布目スリ溝なし	S X - 2	底面 18-7 G-23
19-44	平 瓦	刻印文字瓦「物」、凹面に糸切痕	S X - 3	1層 20-1 G-24



45



46



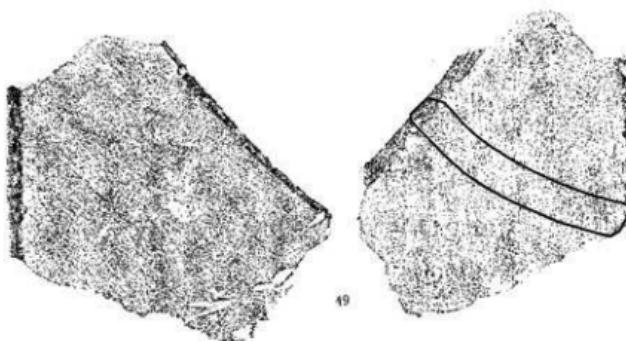
47

第20図 道具瓦 I

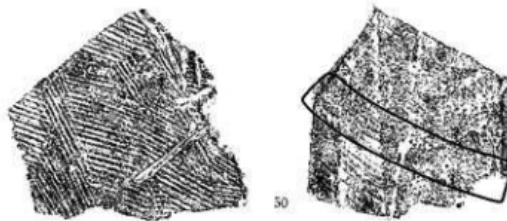




48



49



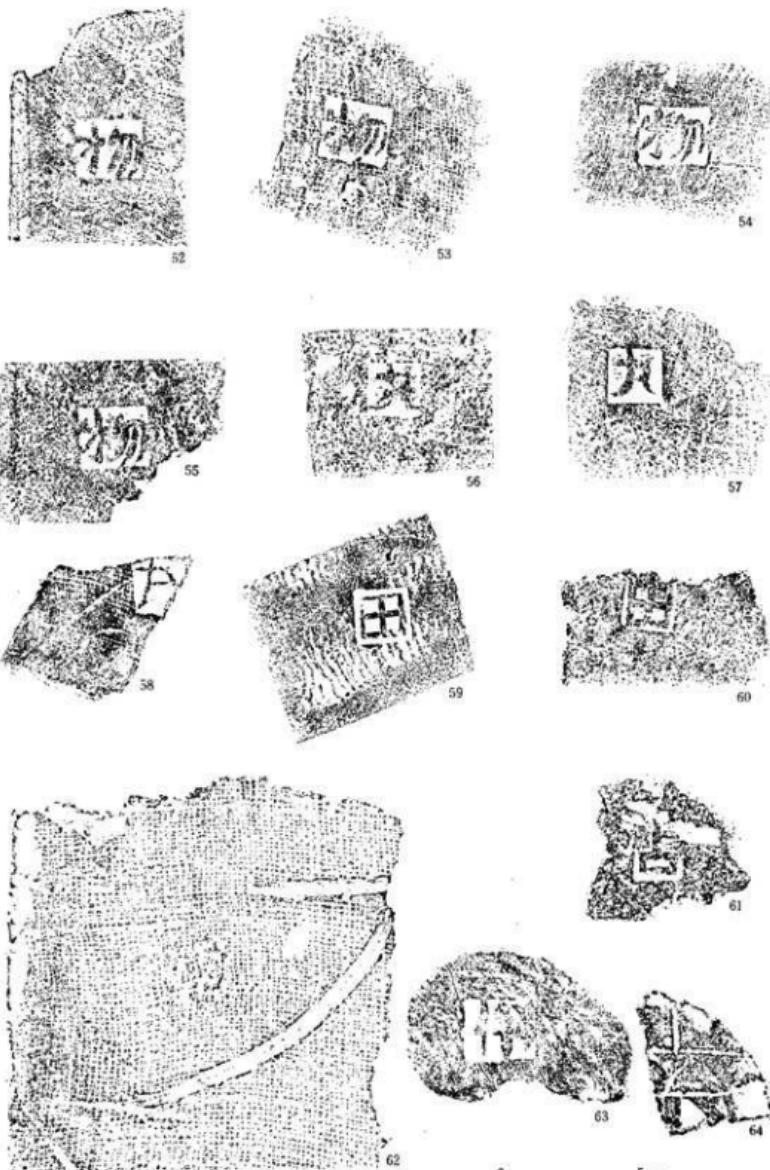
50



51

第21図 道具瓦 II



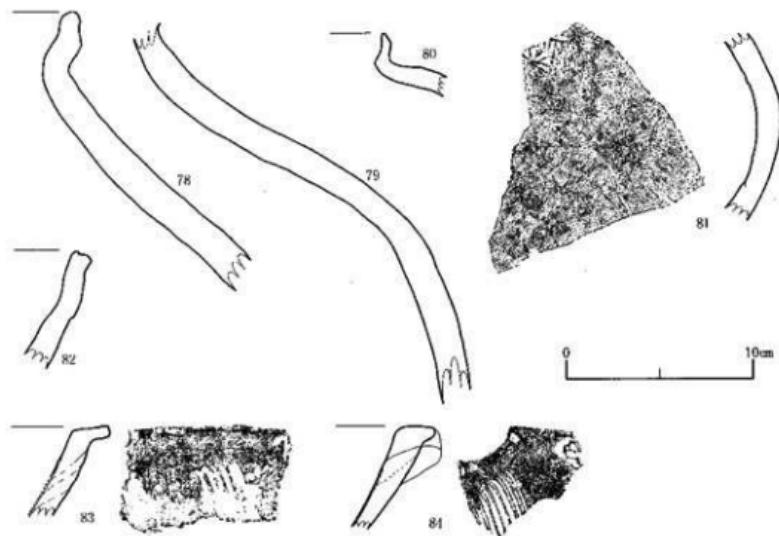


第22図 文字瓦ほか

0 5 cm



第23図 近世陶磁器・カワラケ・土師器



第24図 中世陶器・瓦質土器

表7 道具瓦観察表

回収番号	種類	特徴	地区・遺構・層位	写真図版・登録番号
20 - 45	甕牛瓦	凹面布目若下スリ消シ	S X - 3 1層	29-1 H-1
20 - 46	甕牛瓦	凹面布目若干スリ消シ	S X - 3 1層	19-2 H-2
20 - 47	甕牛瓦	凹面布目スリ消シ、系切跡アリ	S X - 3 1層	19-3 H-3
21 - 48	甕牛瓦	凹面系切痕アリ	S X - 2 1層	19-4 H-4
21 - 49	甕半瓦	凹面とも若干スリ消シ	S X - 2 4層	19-5 H-5
21 - 50	甕半瓦	凹面布目スリ消シ、凸面平行叩き目痕	S X - 3 1層	19-6 H-6
21 - 51	甕半瓦	凸面織用木片痕交叉	S X - 2 1層	19-7 H-7

表8 文字瓦ほか観察表

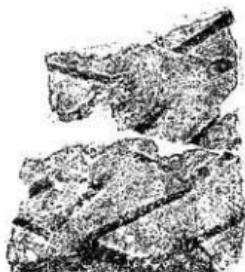
回収番号	種類	特徴	地区・遺構・層位	写真図版・登録番号
22 - 32	刻印文字瓦	平瓦の凹面に「物」	S X - 3 1層	20-2 G-25
22 - 53	刻印文字瓦	平瓦の凹面に「物」上記と同様	S X - 3 1層	G-26
22 - 54	刻印文字瓦	平瓦の凹面に「物」上記と同様	S X - 2 1層	G-27
22 - 55	刻印文字瓦	平瓦の凹面に「物」上記と同様	S X - 3 1層	G-28
22 - 56	刻印文字瓦	平瓦の凹面に「九」	S X - 3 1層	G-29
22 - 57	刻印文字瓦	平瓦の凹面に「九」上記と同様	1区 埃土	20-3 G-30
22 - 58	刻印文字瓦	平瓦の凹面に「九」	S X - 3 1層	20-4 G-31
22 - 59	刻印文字瓦	丸瓦の凹面に「田」	S X - 2 1層	20-5 F-21
22 - 60	刻印文字瓦	丸瓦の凸面に「出」上記と同様	S X - 2 1層	F-22
22 - 61	刻印文字瓦	丸瓦の凸面に「古」	S X - 2 1層	20-6 F-23
22 - 62	刻印文字瓦	平瓦の凹面に「大」カ木:カ	N区 埃土	20-8 G-32
22 - 63	刻印文字瓦	丸瓦の凸面に「伊」	S X - 2 1層	20-7 F-24
22 - 64	刻印瓦	丸瓦の凹面に、ヘラ状工具で平行及び直交する波線	S X - 2 1層	F-25

表9 近世陶磁器・カワラケ・土師器観察表

図版番号	種類	特徴	寸法(単位:cm)	地区・遺構・層位	写真図版
23-63	陶器	高さ5.85、口径12.6、底径4.5、内外面灰釉、高台無地	18C相馬	川区 古土	21-1
23-66	陶器	口付、口径10.6、底径5.4、高さ4.0、見込み焼/日輪八手、18C肥前		川区 表土	21-2
23-67	陶器	高さ5.65、口径10.1、底径4.0、内外面灰釉アリ、高台無地、18C相馬		川区 古土	21-3
23-68	陶器	縦目文印模、口径10.0、高さ5.1、見込みにコニャック印模、18C肥前		川区 表土	21-4
23-69	陶器	底径4.4、内外面灰釉アリ、高台無地、18C相馬		川区 古土	
23-70	陶器	高さ5.95、口径7.8、底径3.7、内外面灰釉アリ、高台無地、18C相馬		川区 表土	21-5
23-71	陶器	口付、口径2.2、口径8.6、底径3.0、18C肥前		川区 古土	21-6
23-72	陶器	口付、五分花コニャック印模、18C肥前		川区 表土	21-7
23-73	陶器	茶付、口径10.2、底径8.6、高さ6.0、内面に印模3ヶ所高台内(下し窓)有り、18C肥前		川区 古土	21-8
23-74	カワラケ	口径5.6、高さ1.95、底径3.4、内外面ロクロ調整、底面削除ヘラグリ		川区 表土	22-1
23-75	カワラケ	口径10.4、高さ2.05、底径6.4、内外面ロクロ調整、底面削除系切り		川区 表土	22-2
23-76	土師器	底径4.8、色剥落焼、内外面ロクロ調整、底面削除系切り	SX-2 6号		
23-77	土師器	高さ3.1、口径13.7、底径5.1、色剥落焼、内外面ロクロ調整、底面削除系切り	SX-2 6号		22-3

表10 中世陶器・瓦質土器観察表

図版番号	種類	特徴	寸法	地区・遺構・層位	写真図版
24-78	中世陶器	素白釉を呈し、底上に細密さがない。裏内側		SK-2 1層	22-4
24-79	中世陶器	上部と同一個体と見られる。		SK-1, 1層	22-5
24-80	中世陶器	暗赤褐色を呈する。裏内側		川区 古土	22-6
24-81	中世陶器	多面削、押出アリ、表面には少々の褐色、裏面は灰褐色を呈する。		SX-2	22-7
24-82	中世陶器	に少い褐色を呈する。裏内側		SX-2	22-8
24-83	瓦質土器	通鉢、近鉢、底径6.本茎位		川区 古土	22-9
24-84	瓦質土器	通鉢、底径、片口、底径7.本茎位		川区 横尾	22-10



第25図 平瓦片



写真1 平瓦片

0 5 cm

表11 平瓦片観察表

図版番号	種類	特徴	寸法	地区・遺構・層位	写真図版
25-85	平瓦	凹面布目スリ溝シ、凸面格子叩き目痕		川区 PH-1	1-1 G-33

写真 2
SX-1
(北→)



写真 3
SX-2
(南→)



写真 4
SX-2底面遺物
出土状況
(東→)



写真5
Ⅲ区北東部壁(SX-2)
断面
(西→)



写真6
SX-3
(南→)



写真7
SK-1
(北→)



写真8
SK-2
(北→)



写真9
Ⅲ区西部の
ピット群
(西→)



写真10
Ⅲ区ピット1
遺物出土状況
(東→)





1



2



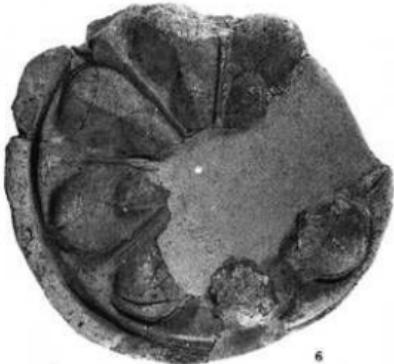
3



4



5



6

写真11 軒丸瓦 I



7



9



8



10

1. F-1 重弁蓮華文 (第12図1)

3. F-3 重弁蓮華文 (第12図3)

5. F-5 重弁蓮華文 (第12図5)

7. F-7 細弁蓮華文 (第12図7)

9. F-9 亂車文 (第12図9)

2. F-2 重弁蓮華文 (第12図2)

4. F-4 重弁蓮華文 (第12図4)

6. F-6 重弁蓮華文 (第12図6)

8. F-8 細弁蓮華文 (第12図8)

10. F-9 三巴文 (第12図10)



1



2



3



4



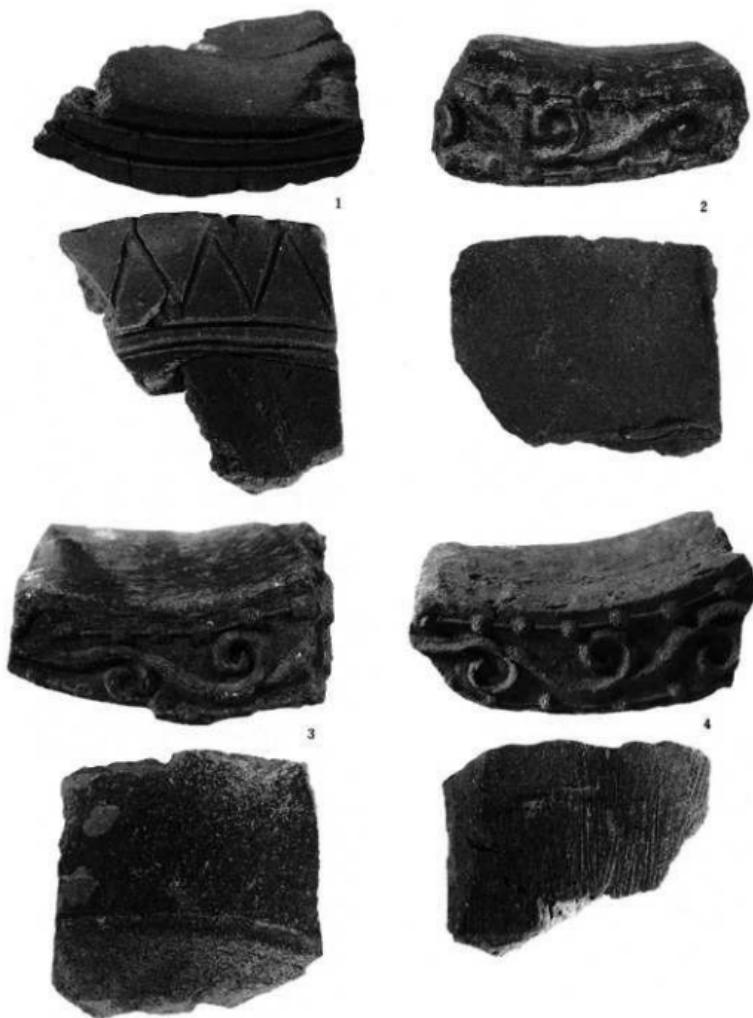
1. G-1 重弧文 (第13图11)

3. G-3 重弧文 (第13图13)

2. G-2 重弧文 (第13图12)

4. G-4 重弧文 (第13图14)

写真13 軒平瓦 I



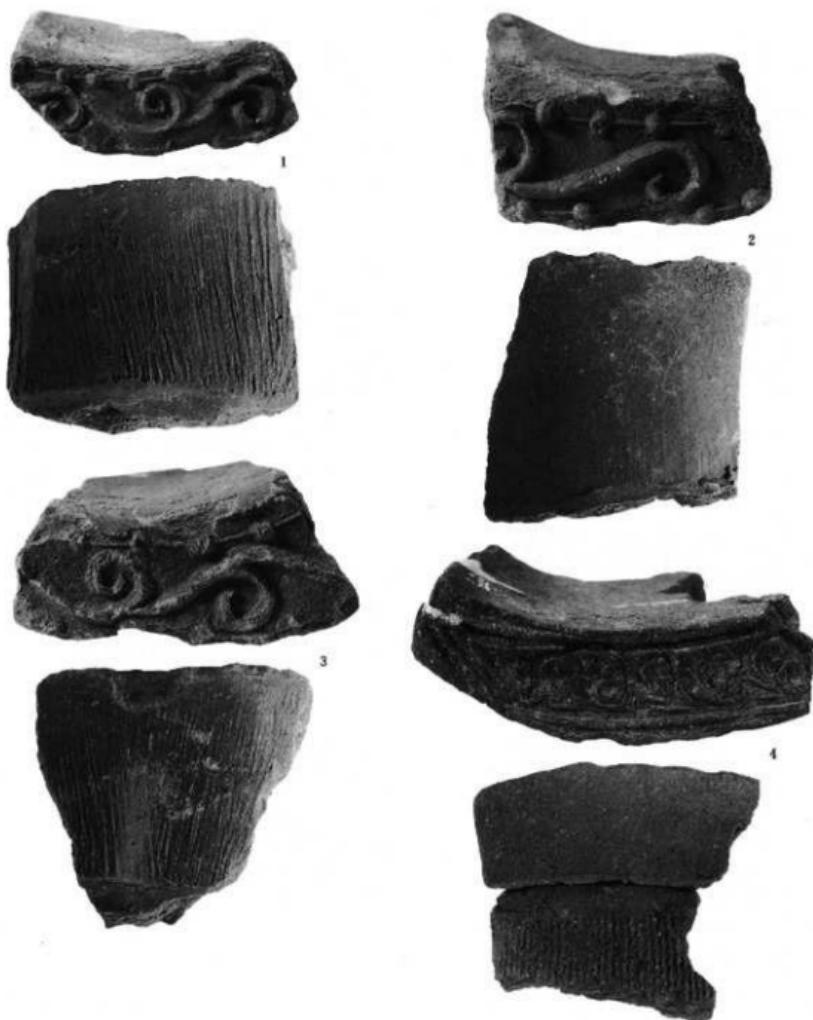
1. G—5 龙纹文 (第13图15)

3. G—7 龙行唐草文 (第13图17)

2. G—6 龙行唐草文 (第13图16)

4. G—7 龙行唐草文 (第13图18)

写真14 轩平瓦 II



1. G-9 銀行唐草文 (第14回19)

2. G-10 銀行唐草文 (第14回20)

3. G-11 銀行唐草文 (第14回21)

4. G-12 銀行唐草文 (第14回22)

写真15 軒 平 瓦 III



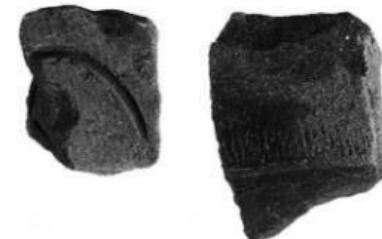
1

2

3

4

1. G-13重弧文 (第14图23)
 2. G-14三重波文 (第14图24)
 3. G-15波状文 (第14图25)
 4. G-16波状文 (第14图26)



5. F-11 (第15图27)



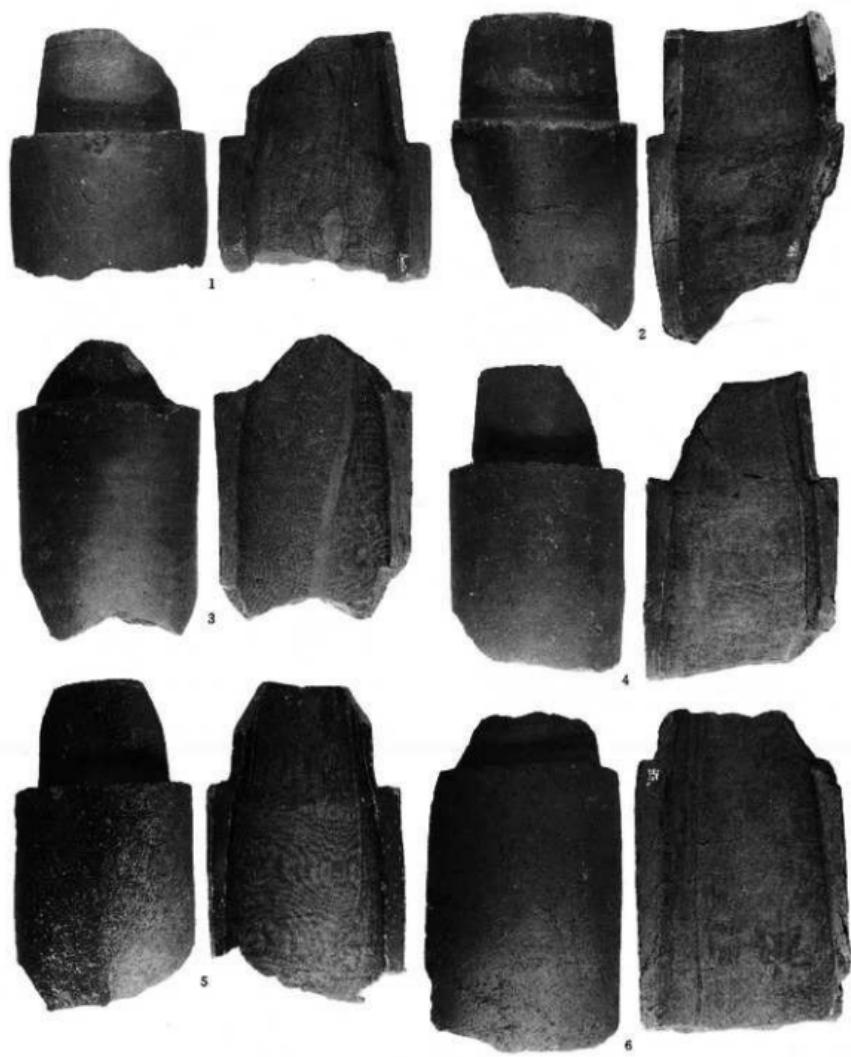
6. F-12 (第15图28)



7. F-20 (第15图29)

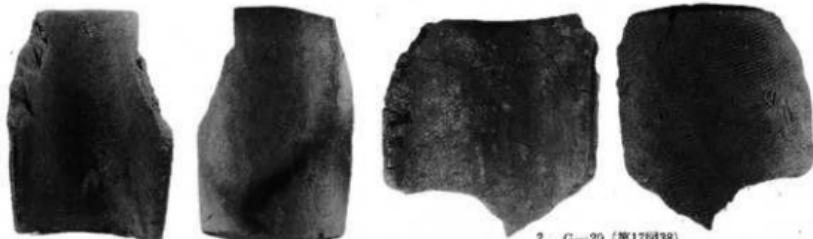
8. F-19 (第15图30)

写真16 轩平瓦IV・丸瓦I



1. F-18 (第15回31) 2. F-17 (第15回32)
4. F-15 (第16回34) 5. F-14 (第16回35) 3. F-16 (第16回33)
6. F-13 (第16回36)

写真17 丸 瓦 II



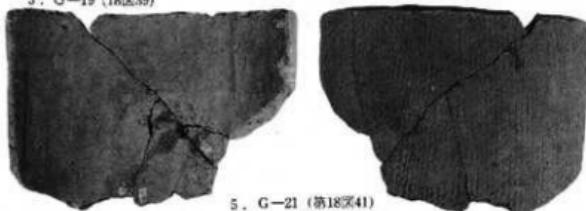
1. G-17
(第17図37)

2. G-20 (第17図38)



3. G-19 (第18図39)

4. G-20 (第18図40)



5. G-21 (第18図41)



6. G-22 (第19図42)



7. G-23 (第19図43)

写真18 平 瓦

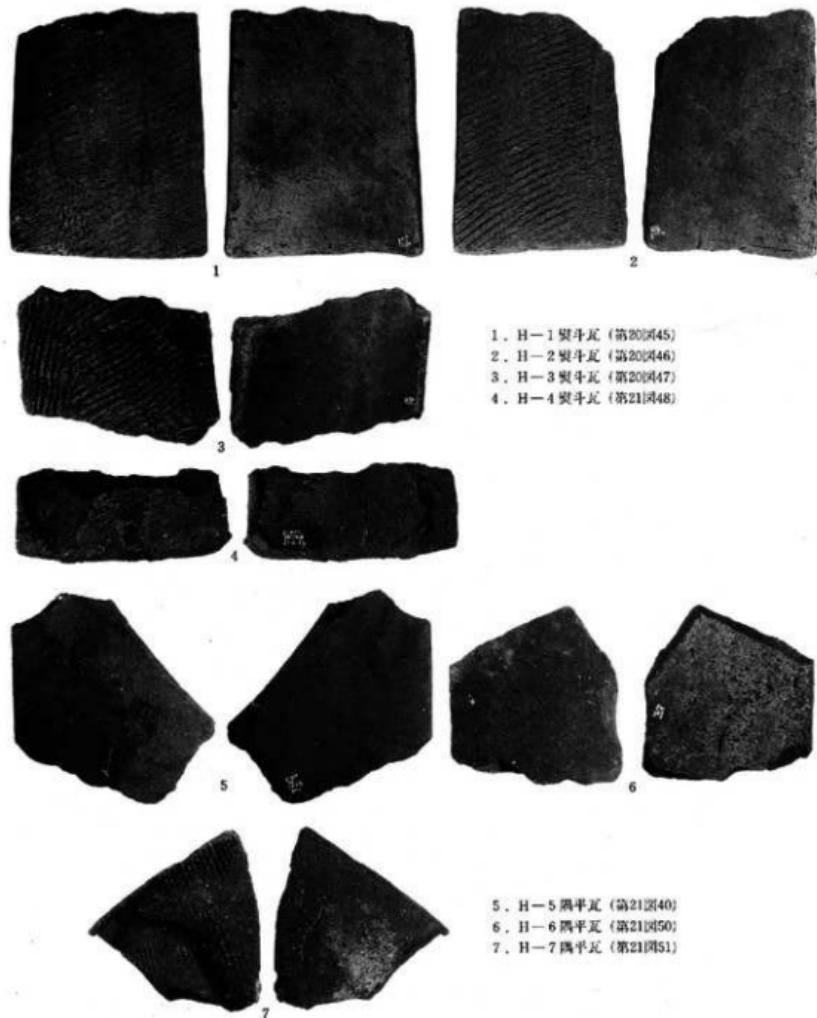
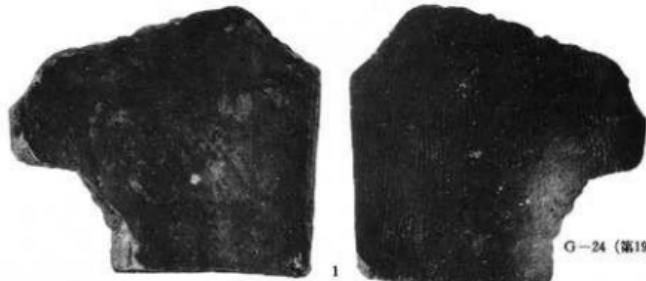


写真19 道具瓦

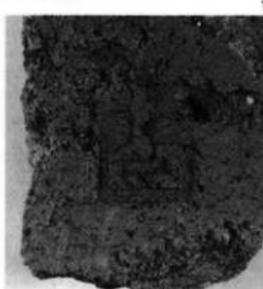
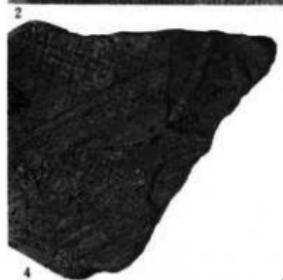


2. G-25 (第22図52)

3. G-30 (第22図57)

4. G-31 (第22図58)

5. F-21 (第22図59)



6. F-23 (第22図61)



7. F-20 (第22図63)



8. G-32 (第22図62)

写真20 文字瓦

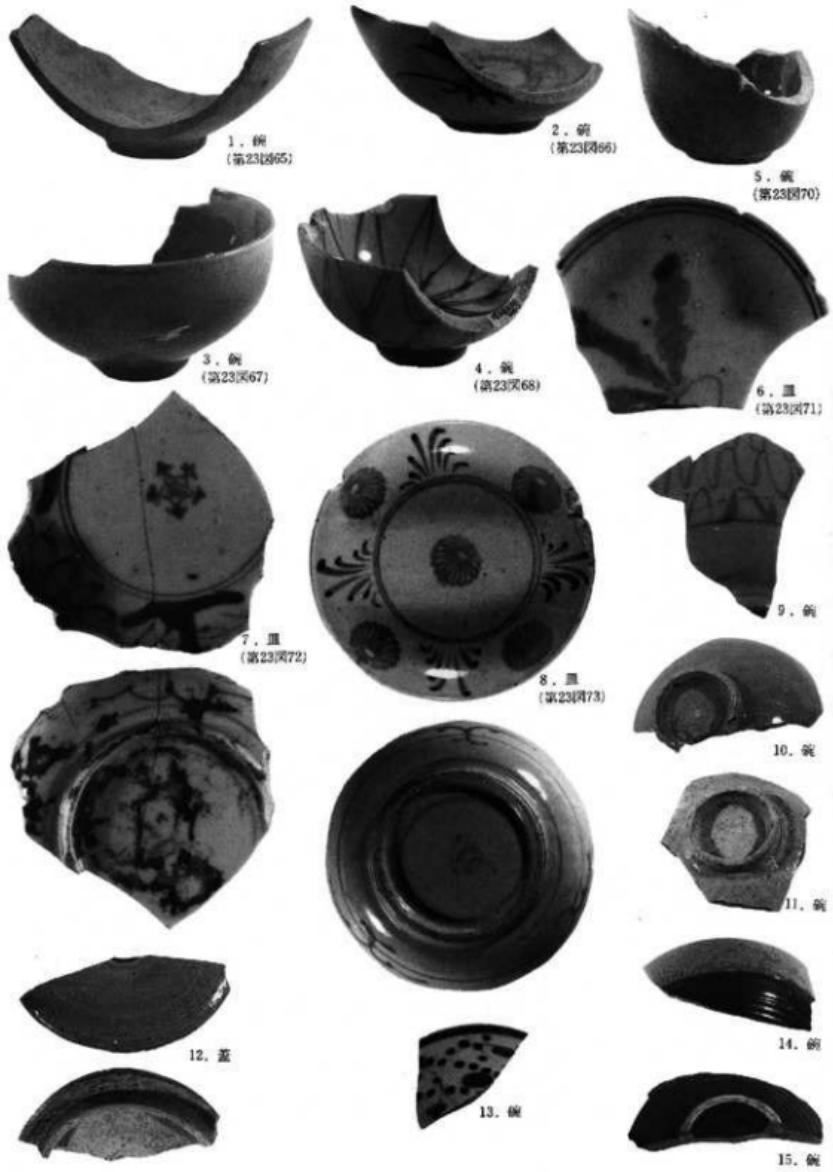


写真21 近世陶磁器

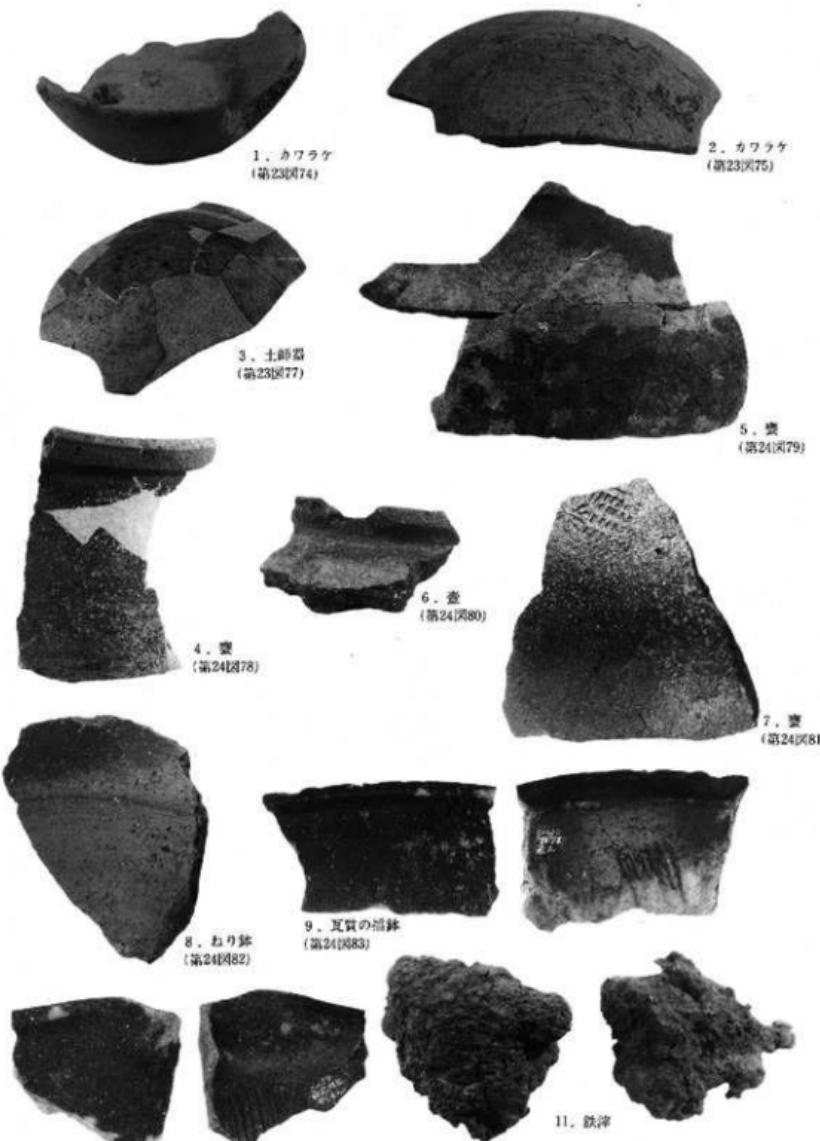


写真22 その他の遺物

〔2〕郡山遺跡

郡山遺跡はJR長町駅東側の広瀬川と名取川に囲まれた位置にある。陸奥国府多賀城が造営される前の官衙及び寺院跡等が発見されており、官衙・寺院跡は7世紀後半～8世紀初頭の年代と考えられる。今年度は個人住宅等にかかる事前調査を7件実施した。以下にその概略について報告を行い、詳細は「郡山遺跡IX」で報告する。

第75次調査 II期官衙南東部の南外側地区にあたる。発掘された遺構は溝跡2条、溝状造構1条、土坑1基、ピット2などである。溝状造構からは梁間式土師器の範ちゅうに入るとと思われる破片が多数出土した。

第76次調査 推定寺域中央西側に位置するところで70次調査E区の北側である。その結果、ほぼ東西方向の溝跡が発見された。遺物は布目瓦片2点だけであった。

第78次調査 II期官衙跡のはば中央部にあたる。レンガ用粘土を採取するため削平を受けた地域であったため、削平の深さを確認することで調査を打切った。

第79次調査 II期官衙北辺のはば中央部にあたる。梁間式期と考えられる壁穴住居跡1軒とそれを切っている溝跡1条が発見された。溝跡はII期官衙北辺を区画する大溝と考えられる。

第80次調査 II期官衙西辺中央より若干南に下ったところである。発見遺構はII期官衙西辺を区画すると考えられる溝跡1条である。

第81次調査 推定寺域の東方約200m、仙台バイパス西側に隣接した位置であり、遺構及び遺物の発見はなかった。

第82次調査 II期官衙中央部の西側である。78次調査区同様、レンガ用粘土採取のため削平を受けたところで、遺構の確認はできなかった。しかしながら削平下面において須恵器片、土師器片が採集できたことで、付近に遺構が存在していたことが推察できる。



第26図 郡山道路と調査位置

文化財課職員録

課長 早坂春一

調査係

係長	佐藤 隆	主事	主浜光朗
主任	結城慎一	タ	東野裕彦
管理係	教諭	佐藤好一	佐藤良文
係長	成田時雄	タ	太田昭夫
主任	岩澤克輔	主事	篠原信彦
主事	白幡靖子	タ	木村浩二
タ	山口 宏	タ	佐藤 洋
		タ	金森安孝
		タ	佐藤甲二
		教諭	小川淳一
		主事	吉岡恭平
		タ	渡部弘美
		タ	工藤哲司
		教諭	橋本光一
			タ
			平間光輔
			教諭 渡辺雄二
			高倉祐一
		主事	宮崎 明
		タ	佐藤 淳
		タ	渡部 紀
		タ	大江美智代

「仙台平野の遺跡群」発掘調査報告書刊行目録

- 第37集 仙台平野の遺跡群Ⅰ—昭和56年度発掘調査報告書—（昭和57年3月）
- 第47集 仙台平野の遺跡群Ⅱ—昭和57年度発掘調査報告書—（昭和58年3月）
- 第65集 仙台平野の遺跡群Ⅲ—昭和58年度発掘調査報告書—（昭和59年3月）
- 第75集 仙台平野の遺跡群Ⅳ—昭和59年度発掘調査報告書—（昭和60年3月）
- 第87集 仙台平野の遺跡群Ⅴ—昭和60年度発掘調査報告書—（昭和61年3月）
- 第97集 仙台平野の遺跡群Ⅵ—昭和61年度発掘調査報告書—（昭和62年3月）
- 第111集 仙台平野の遺跡群Ⅶ—昭和62年度発掘調査報告書—（昭和63年3月）
- 第123集 仙台平野の遺跡群Ⅷ—昭和63年度発掘調査報告書—（平成元年3月）

仙台市文化財調査報告書第125集

仙台平野の遺跡群Ⅳ

—昭和63年度発掘調査報告書—

1 9 8 9 年 3 月

発行 仙 台 市 教 育 委 員 会

仙台市国分町3-7-1

仙台市教育委員会文化財課

印刷 株 東 北 プ リ ン ト

仙台市立町24-24 TEL263-1166

